

礼文・利尻島編年の新検討 —その(4) 道北の島嶼域から遼寧省の契丹墓へ—

柳澤清一

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513 早稲田大学総合研究機構 先史考古学研究所

A New Consideration of the Pottery Chronology of Rebun and Rishiri Islands - Pt. 4: From the Islands of Northern Hokkaido to the Khitan Tomb in Liaoning Province -

Seiichi YANAGISAWA

Institute of Japanese Prehistory, Comprehensive Research Organization of Waseda University.

Nishi-waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 162-0041 Japan

Abstract. "Chinsen-mon pottery" of Okhotsk type pottery is generally considered to be from the 7th to 8th century. In this paper, we considered the stratigraphic excavation situation of "Chinsen-mon pottery" and "Satsu-mon pottery", the age of B-Tm descent, and crossdating with the continent and Sakhalin Island. As a result, the chronology of "Chinsen-mon pottery" is about 200 to 300 years later than the commonly accepted chronology, and was revised to belong to the 10th century.

はじめに

道北島嶼域の編年・年代観は、今でも香深井1(A)遺跡と元地遺跡の調査所見(大井, 1972, 1973; 大井・大場編, 1976, 1981)に依拠しているようである。そうした姿勢は、最近の「オホーツク文化」展図録に見える「時期区分」編年(熊木, 2021)からも容易に窺える^(註1)。そこで本稿では、前稿(柳澤, 2017~2019)の「刻紋土器A(9世紀代)」説をふまえ、後続する刻紋・沈線紋土器(「沈線文土器」)を取り上げる。資料分析は道東から道北・道央へと移動し、島嶼域と石狩低地帯を主に対象とする。ついで内浦湾から青森湾へ向かい、更にサハリン島とアムール川中流域、中国東北部と内蒙古まで視野を拡げ、環オホーツク海域編年(柳澤, 2020b)の10世紀「交差対比軸」を検証し、その精度を高めたい(図1, 以下縮尺不同)。

1. 問題点の所在

1) 「沈線文群」土器の7~8世紀説について

環オホーツク海域の土器変遷をまとめた最新の編年案(表1)によると、「沈線文群」すなわち「沈線文系土器(「沈線文土器」)」は、「7世紀後葉から8世紀前葉」に登場したという。その標本例として、北海道北部では13~15例、東部では16~19例が示されている(熊木, 2018a: 189・212・238)。いずれも著名遺跡の資料である。年代観は研究者によって違いがあるが、大筋では変わりないと言える。しかしながら、擦紋土器(佐藤, 1972)である「北大G期」(1~5)と「沈線文群」(「沈線文系土器」: 13~15, 16~19)の同期は、いつ頃にどの遺跡で確認されたのであろうか。「江の浦式サハリン3類」(6~12, 熊木, 2005)にも、同様の疑問があると思われる。筆者は寡聞にして、「北大G期」と「沈線文系土器」が礼文島・利尻島や斜里周辺と知床半島において、真に共伴と認められるような出土事例を知らない。「佐藤1972編年」(佐藤, 1972; 柳澤, 2020b)の提唱から半世紀を要しても、何ゆえ確実な「共伴」事例が報告されないのであろうか。その原因は、学

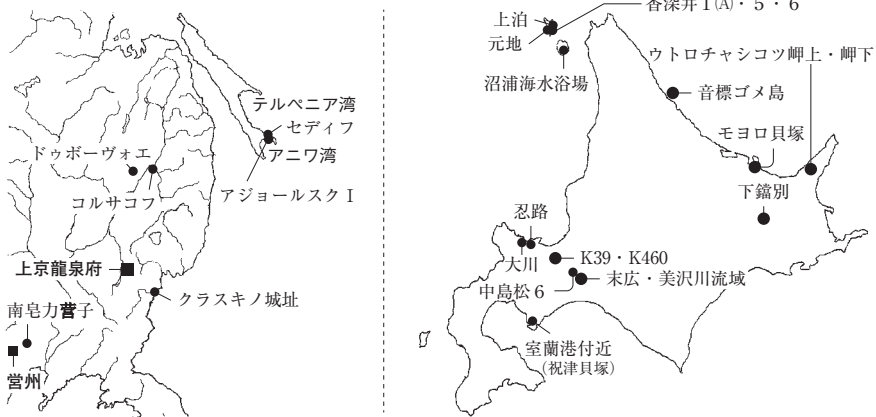


図1. 本稿で検討する主要遺跡の位置.

史的に簡略に説明しえないが、根本的には「沈線文系土器」（刻紋・沈線紋土器）の年代を過大に古く捉えているため、と考えられる（柳澤, 1999a・b, 2008: 21-24・43-54, 2020b: 571）.

2) 層位事実とキメラ（折衷）土器からみた道東部遺跡の編年対比

モヨロ貝塚における戦前・戦後の画期的な調査成果（柳澤, 2020b:228-245）は、「東大編年」（駒井編, 1964; 大井,1970: 28）の発表に至るまで、またそれ

暦年代	続縄文・擦文		オホーツク			
			時期区分	サハリン南部	北海道北部	北海道東部
7世紀後葉 ～8世紀前葉	塚本編年 2期	北大式G期	Ⅲ 沈線文期前半	江の浦式 サハリン 3類	沈線文群前半	モヨロⅠ群c類・Ⅱ群a類・Ⅲ群b類
			沈線文期後半		沈線文群後半	モヨロⅠ群d類・Ⅱ群b類・Ⅲ群c類

北大G期	沈線文期前半	1	2	3	6	13	16
		7	8	9	10	14	17
	沈線文期後半	4	5	11	12	15	18
		19	モヨロⅠ群d類	モヨロⅠ群d類	モヨロⅠ群d類		

表1. 「続縄文土器・擦文土器・オホーツク土器編年表」と標本例の対比（熊木 2018a を抜粋・改変，引用：熊木 2005・塚本 2007）.

以降においても、全く等閑に付されており、それに代わって香深井 1 (A) 遺跡と目梨泊・元地遺跡の調査所見が一樣に尊重されている (柳澤, 2015: 326-327)。

しかしながら、戦前・戦後のモヨロ貝塚調査を主導した児玉作左衛門は、「貝塚トレンチ」(1947 年度)の「貝層」では「オホーツク式土器」に「擦紋式土器」の破片 (図 2-4) が伴って出土したと述べ、「大體」「同じ時代のもの」としている。大場利夫も、両者は「ほぼ同時に出土」したと認め、同時代のものと捉えている (児玉, 1948; 大場, 1961; 柳澤, 2020b: 228-233)。児玉が概説書に示した「擦紋土器」は 4・5 例である (児玉, 1948)。未発表の「貝塚トレンチ」資料には、両例に略並行する擦紋Ⅲ・Ⅳ (19, 24・25) が含まれている (註²)。枝幸出土の 5 例は 24・25 例にごく近接するものである。これは「貝層」出土の 24・25 例の代用標本として選択されたと推察される。4 例の胴部は擦紋Ⅲの 2 本斜格子紋である。口縁部は肥厚し、二列の刺突紋が施される。この部分は刻紋土器 B からの借用と考えられる (柳澤, 2008: 540-546 ほか)。従って 4 例は、擦紋Ⅲと刻紋土器 B の接触に由来するキメラ (折衷) 土器と認められる。この観察をふまえると、貝層中の土器群は次のように変遷したと捉えられる (図 2, 以下「≒」は略並行関係を示す)。

貝層下部 (比定): 刻紋土器 B (3・10・18・12) ≒ 刻紋・沈線紋土器 (11・20: 「沈線文系土器」), 擦紋Ⅲ (19・21), キメラ (折衷) 土器 (4)

貝層上部 (比定): 擬縄貼付紋土器 (13・14・22・23・26) ・擦紋Ⅳ (24・25 ≒ 5)

貝層下の砂層は刻紋土器 A の包含層である。刻紋土器 A には、擦紋Ⅱのハケメ調整痕や口唇部に凹溝 (凹線) を有するもの (16, 柳澤 2015: 131-132) があるので、次の編年が仮設される。

砂層: 刻紋土器 A (1・2 ≒ 9 ≒ 16・17) ≒ 擦紋Ⅱ (他地点から出土)

他方、表土下の黒土層 (15) では、擦紋Ⅱ～Ⅳや刻紋土器 B, 擬縄貼付紋土器などは、報告された資料には見当たらない。黒土層はポスト擦紋期であり、悉皆的な実査によると「貝層」と同様に「トビニタイ土器群Ⅱ」(菊池, 1972) を僅かに伴う (柳澤, 2020b: 248-257)。従って、次のように編年される。

児玉 (1948)	モヨロ貝塚 (64)	「貝塚トレンチ」(未公表)
<p>(砂層)</p>	<p>砂層 9</p>	<p>16</p> <p>17</p>
<p>3</p> <p>4</p> <p>(貝層(1期))</p>	<p>10</p> <p>11</p> <p>12</p> <p>貝層</p>	<p>18</p> <p>19</p> <p>20</p> <p>21</p>
<p>5</p> <p>(貝層(2期))</p>	<p>13</p> <p>14</p> <p>貝層</p>	<p>22</p> <p>23</p> <p>24</p> <p>25</p> <p>26</p>
<p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>(黒土層)</p>	<p>15</p> <p>黒土層</p>	<p>27</p> <p>28</p> <p>29</p>

図2. 「忘失」されたモヨロ貝塚編年と未公表資料の対比。

黒土層: ソーメン紋土器 (6 ~ 8 ≒ 15 ≒ 27・29) ≒ トビニタイ土器群Ⅱ (28)

以上に復元した 1948 年の「モヨロ貝塚編年」は、北海道内の研究者が第一次発掘調査中に層位・共伴事実をふまえて考案した画期的な成果 (名取, 1948; 児玉, 1948) であつたと評価される。現在の通説編年 (表 1) とは新旧が逆転しているが、1972 年以前の諸資料 (図 3) を検討すると、この考案は道東一帯で層位的に成立することが分かる (柳澤,

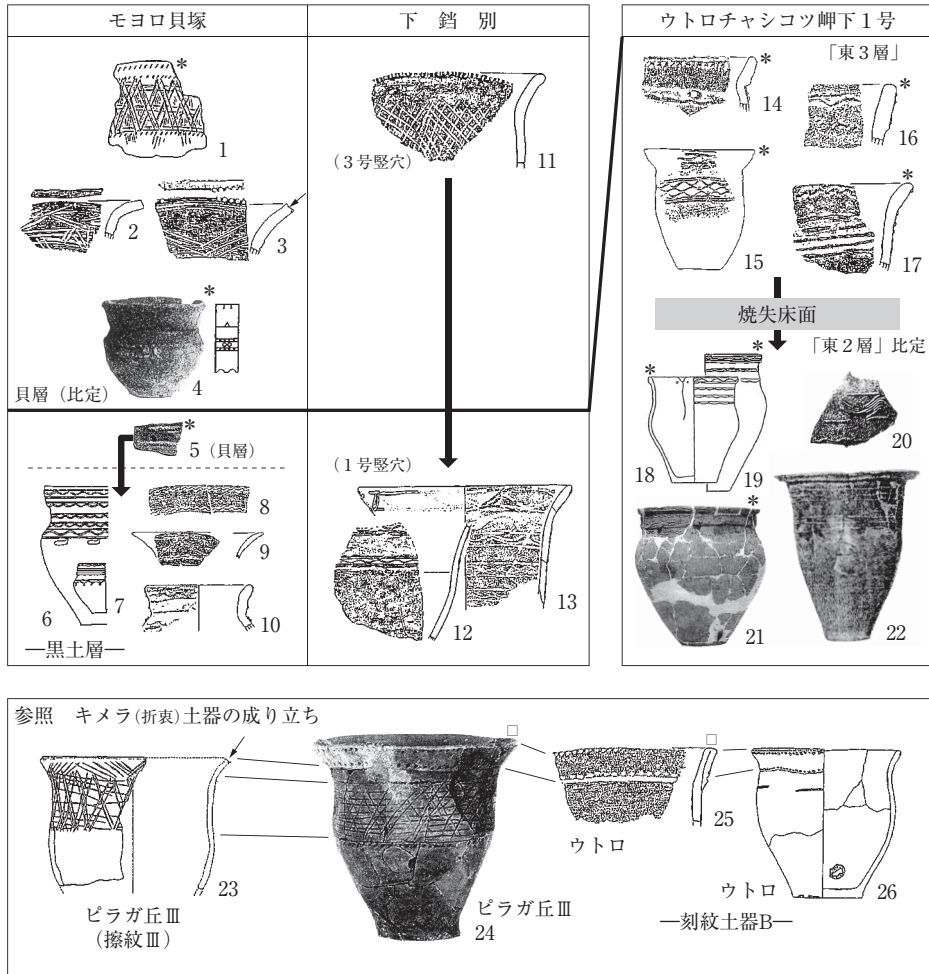


図3. 道東で等閑視されている層位編年の対比、擦紋系キメラ（折衷）土器の成立。

1999b : 51-94)。通説の編年観（熊木，2018a，2021ほか）によると、ソーメン紋土器は「擦文土器」の強い影響を受けて「トビニタイ土器群」に変容したという。それに対してウトロチャシコツ岬下遺跡の1号縦穴住居址（以下、縦穴と表記）では、両者の並行的な変遷が層位的に捉えられる（柳澤，2015 : 527-585，2020b : 第139・162図）。

「東3層」：擬縄貼付紋土器（14），トビニタイ土器群II（15・17），ソーメン紋土器2（16）

「東2層」：ソーメン紋土器3（18→19→21）≒トビニタイ土器群II（20→22）

両層には、断面が平坦・蒲錐形の貼付紋が併存しており、それぞれ複数の小細別に分かれる（柳澤，2020b :

146-148）ので、この住居址は断続的に再利用されたと考えられる（柳澤，1999b，2015 : 560-572）。

弟子屈町の下鎧別遺跡（沢ほか，1971）では、重複利用の縦穴2軒が検出されており、3号（11：擦紋Ⅲ（古）→1号（12・13：トビニタイ土器群II（新：（8）類）の序列で編年される。11例は、モヨロ貝塚のキメラ（折衷）土器（1）に近接するので、「貝層下部」比定の擦紋Ⅲ＝刻紋土器B，刻紋・沈線紋土器に略対比される（図2参照）。

それに対して12・13例は、ウトロチャシコツ岬下遺跡（「東2層」）の22例に並行する。従って、「東3層」の擬縄貼付紋土器（14）・ソーメン紋土器2（16）≒トビニタイ土器群II（15・17）→下鎧別遺跡1号縦

穴のトビニタイ土器群Ⅱ (12・13), という編年が層位的に成り立つ (以下, →: 新旧関係を示す). これら三遺跡の並行関係についてモヨロ貝塚とウトロチャシコツ岬下遺跡の擬縄貼付紋土器 (5, 14) を「鍵」資料として整理すると, 図に矢印で示したように, 擦紋Ⅲからポスト擦紋期への変遷は矛盾なく捉えられる^(註3). またその過程は, 擦紋Ⅲと刻紋土器 B のキメラ (折衷) 土器の成立事情からも傍証される (「23 ≒ 24 ≒ 25 → 26」).

先に引用した表1の編年案では, モヨロ貝塚「沈線文系土器」(図2-11 ≒ 20) の年代を「7世紀後葉」に比定する. また後続するソーメン紋土器は, 「8世紀後葉～9世紀前葉」の所産としている. しかし, そうした伝統的な年代観をモヨロ貝塚内で成立させるには, 図3に見える層位的な序列を逆転させ, 更に貝層中のキメラ (折衷) 土器や擦紋Ⅲ・Ⅳが黒土層と表土の間から出土したと主張しなければならない^(註4).

筆者の考えでは, そのキメラ (折衷) 土器 (1) や擦紋Ⅲ (2・3) は刻紋・沈線紋土器に伴うものであり, 10世紀代に比定される. 通説の年代観とは200～300年ものずれを生じるが, これは何を意味するのであろうか (柳澤, 2020b: 65・67・319). 次に島

嶼域へ移動して, 通説の編年観・年代観を層位と型式の両面から見直してみよう.

2. 香深井5遺跡3号竪穴住居址と魚骨ブロック13の編年

香深井5遺跡 (内山ほか, 2000) の3号竪穴資料については, 既に反復的に検討している (柳澤, 2011: 348-354, 2020a・b ほか) が, ここでは「発掘区」土器とされた「床面」資料を補い, 道東と礼文・利尻島の間で対比したい. 2007年8・10月の実査によると, 「床面」資料は大きく三期に分けられる (図4).

- (a) 一般に「十和田式」とされるもの (図を省略)
- (b1) 刻紋土器 A (7～9), (b2) 擦紋Ⅱ (4～6・10), (b3) 元地Ⅰ式 (擦紋Ⅱ並行: 11・12)^(註5)
- (c) 擦紋Ⅲ (2), 本例のみが確認されている^(註6)

(b) 期とした三種の土器は, 道東のキメラ (折衷) 土器によると同時代に属すると認められる. 「X」字状紋と口唇部の凹溝, 大波状紋と円形スタンプ紋の共通性からみて, 3例と4～6・10例, 13～15例に略対比される. これらは石狩低地帯の一般的な所見によると, 9世紀の後半に比定される. それに従うと層位不詳の3例 (≒ 13) は, 刻紋土器 A や擦紋Ⅱ・元地Ⅰ

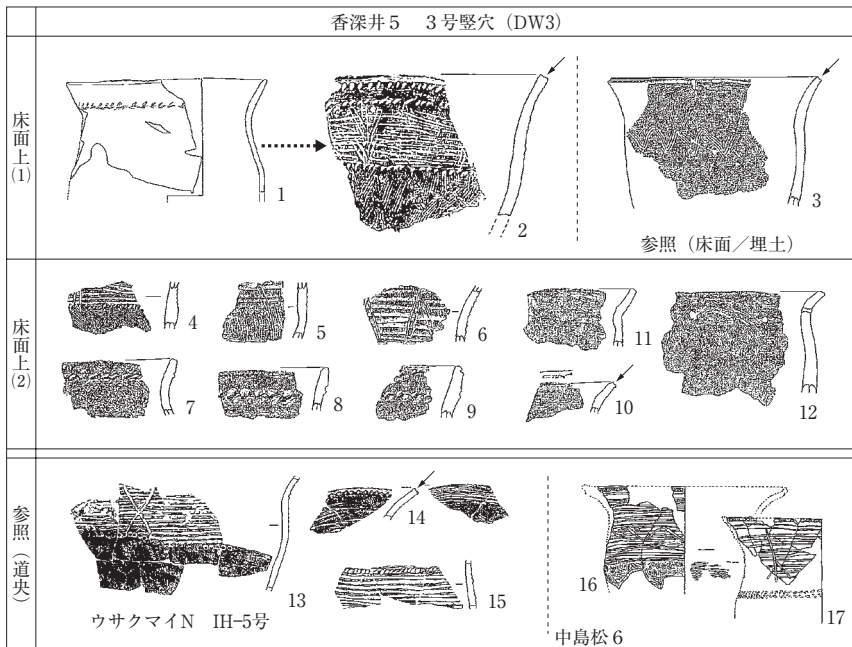


図4. 香深井5遺跡3号竪穴床面土器と石狩低地帯の擦紋Ⅱの対比.

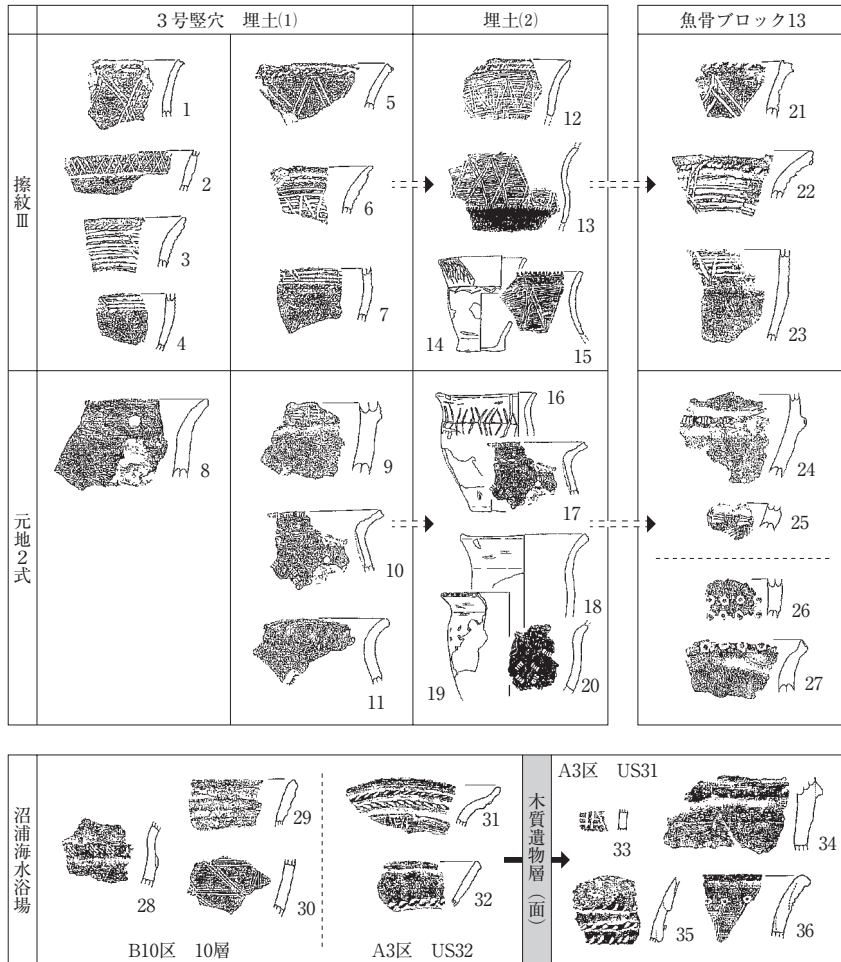


図5. 香深井5遺跡3号竖穴と沼浦海水浴場遺跡B地点土器群の層位編年。

式とともに床面で発見された可能性が想定される。

第1次調査では、刻紋土器Aから元地2式・擦紋Ⅲにいたる土器変遷が層位的に確認されている（種市ほか，1997；柳澤，2020a：162-166）。それに3号竖穴（2次調査）の所見を加えると、各類の変遷は以下のように捉えられる（図4）。

- (1) IV層(新)：刻紋土器A(古)＝3号竖穴床面(7)：～9世紀代，十和田式系の要素を持つ土器群
- (2) III層(中～新)＝3号竖穴：(8)→(9)＝擦紋Ⅱ(4～6)・元地1式(11・12)：9世紀代
- (3) II層：3号竖穴の埋土(擦紋Ⅲ・元地2式)：10世紀代

この編年案は、香深井1(A)遺跡の古式の土師器を伴う混在的な出土状況（柳澤，2015：355-368）

とは一致しない。しかしながら、刻紋土器A・擦紋Ⅱ・元地1式(9世紀)の同時代性を証明するキメラ(折衷)土器（柳澤，2018・2019ほか）に留意すると、「6世紀後葉～7世紀中葉」に比定され古式土師器を3号竖穴の床面資料(1・4～12)に対比することは、前述の道東編年案(図2・3：「砂層」→「貝層」下部→「貝層」上部→「黒土層」)からみて困難であると言えよう。

次に(3)期：II層とした埋土と、それを被覆する魚骨ブロック13の資料を分析したい(図5)^(註7)。埋土(「覆土」)の土器は若干の刻紋土器Aを伴うが、主体を占めるのは古手の擦紋Ⅲと元地2式である。元地2式の口唇部と口端部、胴部・突帯上には、各種のスタンプ紋(胴部では菊花状を呈する)、又は刻み目紋が施される。これらは安定的に伴出している。時

期的には、同式の (3)・(4) 類が主体を占める。上層の魚骨ブロック 13 でも、類似するものが出土しており、埋土から連続する様子が読み取れる。ただし、スタンプ紋の配置と施紋の部位が変化した 26・27 例は元地 2 式の (5) 類に属すると思われる。そのように捉えたと、3 号堅穴では矢印で示したように、次のような層位編年が仮設される (図 2・3 参照)。

- (a) 床面上 (刻紋土器 A・元地 1 式・擦紋Ⅱ) :
モヨロ貝塚の貝塚トレンチ「砂層」(9 世紀代)
- (b) 覆土 (元地 2 式・擦紋Ⅲ (3) ~ (4) 類) :
同上「貝層下部」比定 (10 世紀代)
- (c) 魚骨ブロック 13 (元地 2 式・擦紋Ⅲ (4) ~ (5) 類) :
同上「貝層下部」比定 (10 世紀代)

近年に調査した利尻島の沼浦海水浴場遺跡 (柳澤ほか編, 2022) では、この 3 号堅穴の編年案を裏づける資料が層位的に発見されている (28 ~ 32 → 33 ~ 36)。A3 区と B10 区は隣接しており、双方で検出された「木質遺物層 (面)」の直上・直下から出土した土器群は、次のように編年される。

B10 区・A3 区 : モヨロ貝塚「貝層下部」並行
元地 2 式 (28)・刻紋・沈線紋土器 (29)・擦紋Ⅲ (30) ……各 (3) ~ (4) 類期
擦紋Ⅲ (31)・刻紋・沈線紋土器 (32) ……各 (3 ~ 4) 類期^(註8)
……………木質遺物層 (面) の堆積……………

A3 区 (同上「貝層下部」並行)
擦紋Ⅲ (33)・元地 2 式 (34)・刻紋・沈線紋土器 (35・36) ……各 (6) 類期

木質遺物層は、各土器の (3)・(4) 類と (6) 類の境界面として捉えられるので、B-Tm の降下年代 (A.D.937 ~ 938 年 : 福澤ほか, 1998) と重なる可能性がある (柳澤, 2020b : 535-540 ほか)。沼浦海水浴場遺跡の資料で特に注目されるのは、魚骨層ブロック 13 (21 ~ 25 : (4) 類, 26・27 : (5) 類) に後続する土器群 (33 ~ 36) が層位的に検出されたことである。34 例の元地 2 式 (6) 類では、突帯上の各種スタンプ紋 (24・28) が消失し、35 例の刻紋・沈線紋土器 (6) 類では、その後に発達する「折り返し手法」の登場が注目される。

また、刻紋・沈線紋土器の (6) 類に比定した 36

例の円形刺突連繫紋は、B-Tm 降下前後における島嶼域とサハリン島、アムール川中流域を結ぶ編年上の「手掛かり」となることを、あらためて指摘しておきたい (柳澤, 2020b : 527-533, 555-557)。

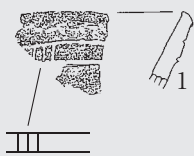
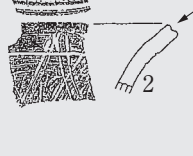

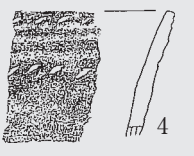
3. 沼浦海水浴場遺跡 C3 区新資料の編年

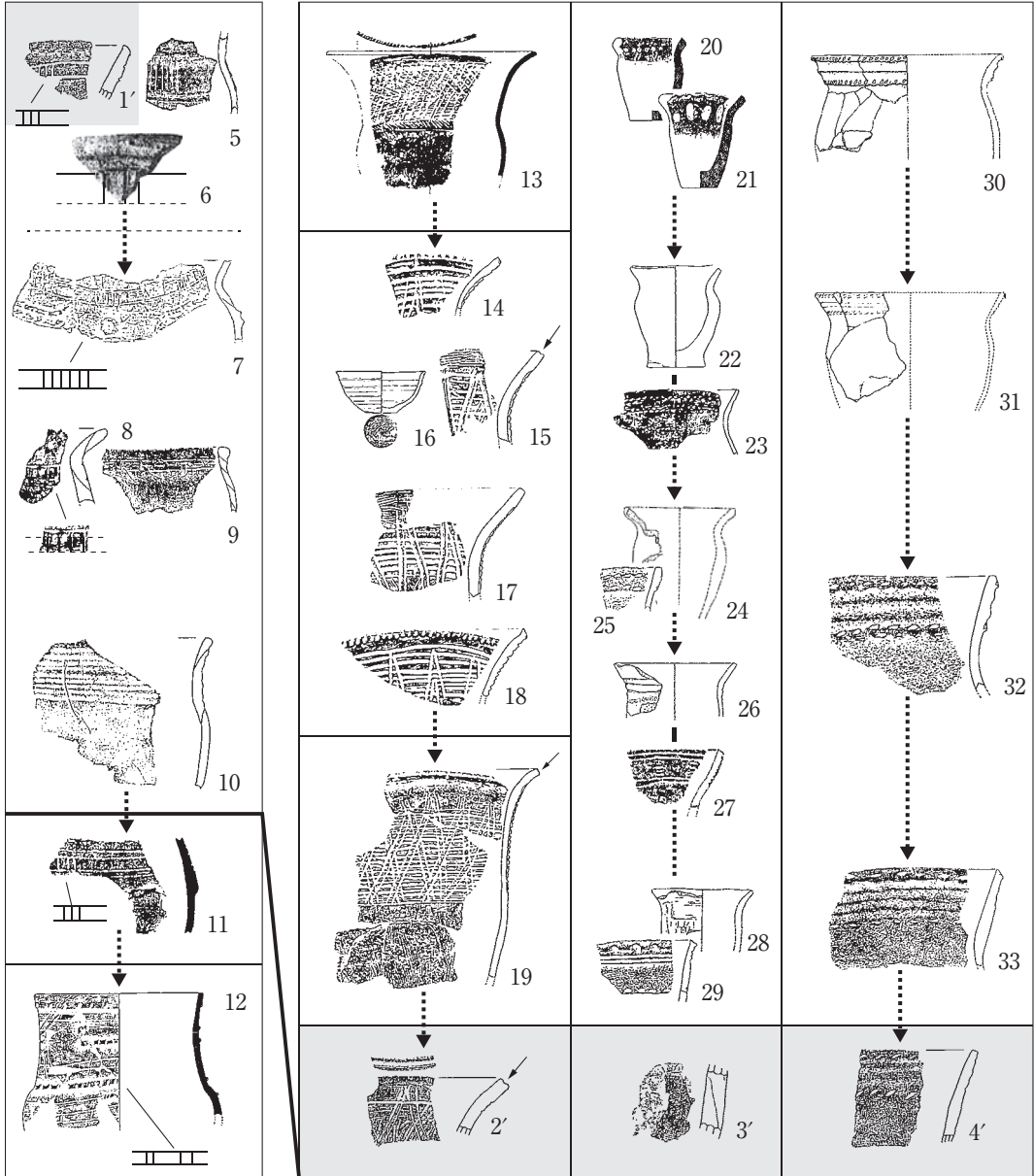
礼文・利尻島遺跡調査の会では、利尻島の沼浦海水浴場遺跡で継続的な調査を実施しており、これまでに第 1 ~ 4 次調査の概報を刊行している。先に第 3・4 次調査から A3 区・B10 区の資料を引用したが、C3 区においても、香深井 5 遺跡 3 号堅穴・魚骨ブロック 13 の層位編年 (図 4・5 : モヨロ貝塚「砂層」→ 貝層下部) 並行を裏づける良好な資料が発見された (図 6 : 1 ~ 4, 1' ~ 4')。

C3 区の調査は、日程上の制約から途中で作業を停止している。概して遺物の出土量は少なく、土器はすべて破片である。層序は、1 層 (US320), 2 層 (US321), 3 層 (US324), 4 層 (US325), 5 層 (US326) に分かれる。堆積は土層のみで構成され、B 地点各区や C2 区下部のような貝層は検出されていない。資料は刻紋・沈線紋土器が主体を占め、A3 区・B10 区と同様に元地 2 式の伴出が確認される。以下、特に 7 点の資料について編年上の位置を検討したい。

図 6 の上段は 3 ~ 5 層の土器である。1 例には、平行線内に 3 本の分割垂線が施されている。これは刻紋・沈線紋土器では稀なモチーフ (「分割垂線紋」) であり、時期的には (5)・(6) 類の頃から目立つようである (柳澤, 2020b : 551-557)。香深井 1 (A) 遺跡の 6 例は厚手の元地 2 式である。これは 1 例に見える「分割垂線紋」を転写したキメラ (折衷) 土器として注目される。本例は近代 Pit 中で出土しているが、黒褐色砂質土層に由来すると推定される。同層では、幅広く構成された分割垂線紋を有する 5 例が発見されている。この紋様は、アムール川中流域のコルサコフ式 (5) ~ (6) 類 (渤海滅亡 : A.D.926 年前後に比定される) でも用いられている。筆者の編年案では、双方の年代はほぼ対応すると捉えている (柳澤, 2020b : 551-557)。

1・1' 例に対比される資料は、枝幸町音標ゴメ島遺跡 (川名・高島, 2010) でも 7・8 例 (9・10 例に

	US326	US326	US325	US324
沼浦海水浴場				



←：凹溝

図6. 沼浦海水浴場遺跡 C3区新資料の検討(1).

略並行)として発見されている。モヨロ貝塚やウトロ遺跡にも類例がある。いずれも、近接または並行するものと思われる。道北の島嶼域には新しい実例も存在する。上泊遺跡の11例では胴部上半に施される。これは(6)類に比定される。元地遺跡の12例は、通説編年(熊木, 2018a・2021ほか)によると「元地式」に接続するソーメン紋土器に対比されている。しかし胴部の分割垂線紋は1・1'に由来するものであり、擦紋Ⅲの新しい時期(10世紀後半)に比定される。小ポッチの連繋貼付線についても、同様の年代観が導かれる。

次に2例の擦紋Ⅲである。これは胎土・焼成からみて搬入品と思われる。石狩低地帯の擦紋Ⅲから編年上の位置を探ると、「擦紋Ⅲ(1)類(13)→(3)類(14~18)→(4)類(19)→(5)類(2・2')」という変遷が想定される。斜格子紋の資料は、厳密に2例と同系列ではないが、大筋の変遷は記載どおりで矛盾しない。口唇部の凹溝も2・2'例までは存続しており(図4・6参照)、北大式系要素の伝統性が窺える。

続いて元地2式の3例である。厚手でずっしりと重い破片である。先に3号堅穴床面土器として、元地1式の2点(図4-11・12)を引用したが、C3区の3例は、擦紋Ⅲ・刻紋・沈線紋土器に伴出した資料である。元地1~2式にかけての出土状況は、旧稿において検討したように、「刻紋土器A期(20・21→22→23)→刻紋・沈線紋土器(古)期(24・25)→刻紋・沈線紋土器・元地2式(擦紋Ⅲ並行,(4)類(26・27)→同(5)類(28・29)」, という流れで捉えられる(柳澤, 2015:239-246・331-333ほか)。従って3・3'例は28・29例に並び1・2例とともに、元地2式の(5)類期に位置するものと考えられる。C3区の4・4'例は、摩擦式浮紋帯に斜位の刻紋を加えた資料である。この系列の変遷は香深井1(A)遺跡において、刻紋・沈線紋土器の「(1)類:30例→(2)類:31例→(3)類:32例→(4)類:33例」という流れで捉えられる。4・4'例は33例に後続するので、これは刻紋・沈線紋土器(5)類期に比定される。

次に図7に掲載したC3区の2点を分析する。8・9例は、ポッチや貼付線を特徴的に施した装飾的な土器である。図示した範囲で他資料と比べると、矢印で示

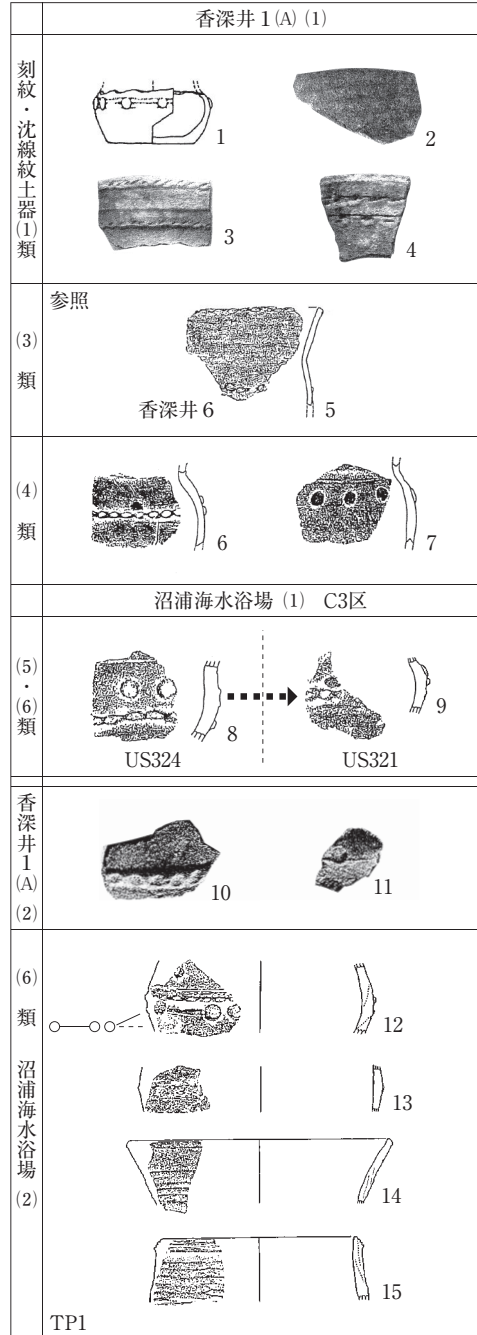


図7. 沼浦海水浴場遺跡C3区新資料の検討(2).

したように、細部で小細別レベルの変化が想定されるので、少数ながらも安定的な土器系列であったことが分かる。最も古い(1)類期では、刻紋・沈線紋土器(1)類(2~4)とともに、同日に発見された1例があげられる。これは先に貼付隆起線をめぐらせ、その上に円

形ポッチ（ボタン状）を間欠的に施紋したものである。残念ながら香深井1（A）遺跡では、(2)・(3)類の実例が見当たらない。香深井6遺跡（前田・藤沢ほか、2001）には、摩擦式浮紋土器にポッチや貼付線を用いた5例が出土しており、これは(3)類に比定される。

(4)類期に入ると、ポッチと鎖状貼付線ないし幅広い凹溝を併用した実例がやや目立つようになる。6・7は「魚骨層I」の出土例であり、(4)類に比定される。その上の黒褐色砂質土層（(5)類期）や表土層には、6・7例と異なる資料として10・11例が発見されている。これはポッチをやや太い貼付線で繋ぐタイプである。

沼浦海水浴場遺跡C3区出土の8・9例には、こうした連繫要素の扱いは認められない。むしろ8・9例は、魚骨層Iの6・7例に類似している。その点に留意すると、(4)類：6・7例に後続するのはC3区の8・9例であり、10・11例もそれに近い時期かと推測される。そこで層位差を考慮して、8例を(5)類とし、9例は(6)類に比定する。沼浦海水浴場遺跡のテストピット（TP1）では、8例に後続する12・13例が(6)類の14・15例に伴出している。他類の混在も認められないので同時期と見做せる。

以上のとおり、資料の裏付けは十分とは言えないが、C3区の資料（図6-1～4）は8・9例とともに刻紋・沈線紋土器、元地2式の(5)～(6)類期に属することが矛盾なく捉えられた（1→5→6・7→8→9・12～15）と思われる。

C3区では、これまでの分析とモヨロ貝塚を軸とした道東編年案（図2・3）を傍証するキメラ（折衷）土器の好資料（図8-19）が発見されている。以下、図7の細分編年をふまえて、その編年上の位置を検討してみよう。

香深井1（A）遺跡では、刻紋・沈線紋土器は(1)～(5)類までが主体を占める。確実に(6)類と認められる資料は、1年に及ぶ悉皆的な実査においても見出されていない。他方沼浦海水浴場遺跡のB地点では、(4)類までの資料が少なく、今のところ(5)・(6)類が主体を占める傾向が認められる（図8）。

そこで両遺跡の資料を観察すると、キメラ（折衷）土器の19例をはじめ、摩擦式浮紋を施す土器系列では、

- (a) 刻紋・沈線紋土器 (1)類 (3例＝1・2, 4・5……H12区「魚骨層II」, 1949.6.10)

- (b) 同 (3)類 (6例……G13区「魚骨層II」, 1949.6.24)

- (c) 同 (4)類 (9・10例……G12区「魚骨層I」＝7・8例……11例 (I区914:排土))

- (d) 同 (5)類 (13例……A1区US1……≒14例(表土層)・12例 (C3区US324))

- (e) 同 (6)類 (17例……TP1US155 (下層)＝又は→18例 (C2区US307))

という順序で連続的にたどれる。

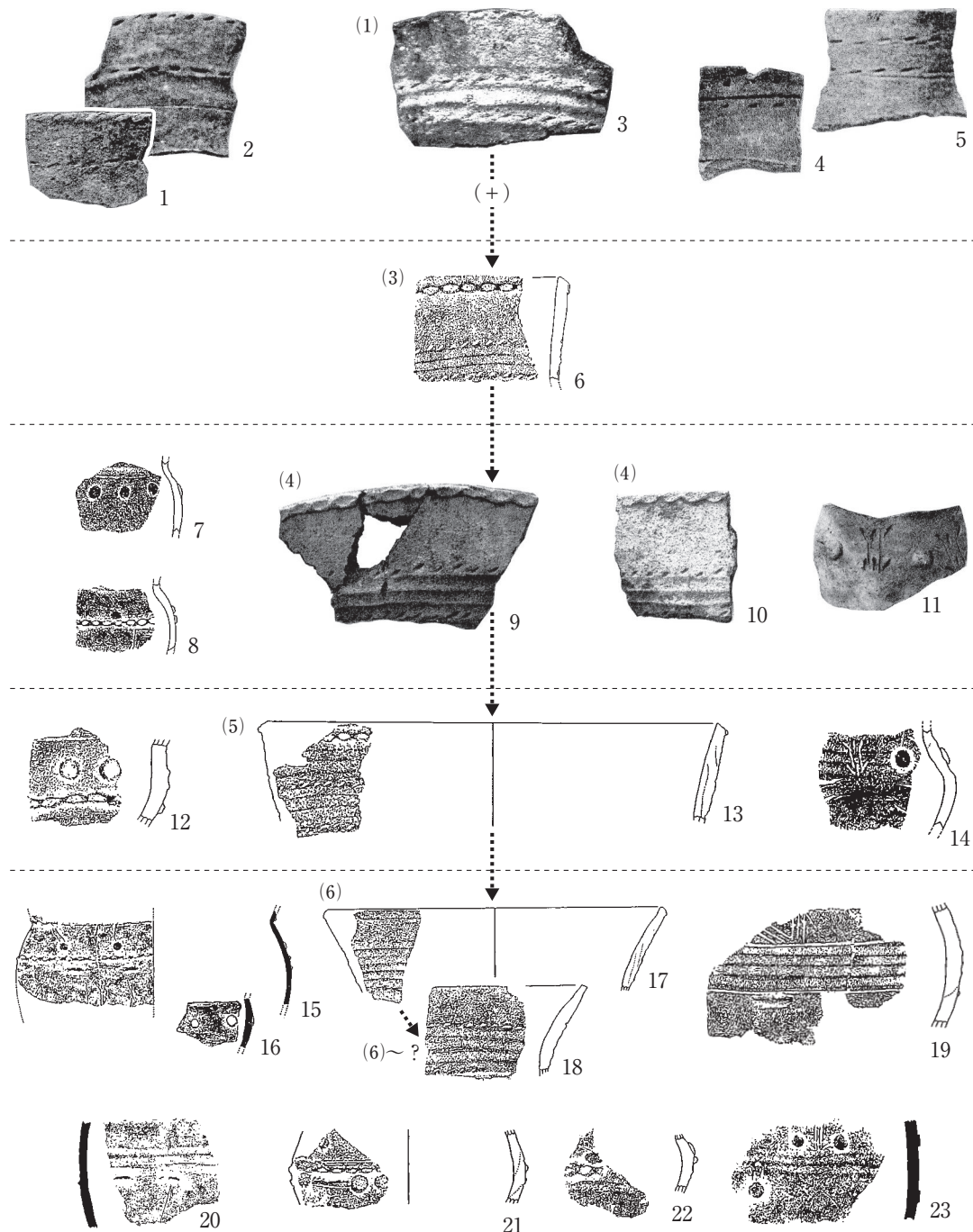
(6)類に続く土器群は沼浦海水浴場遺跡に乏しいが、礼文島の上泊遺跡では、(5)類(9)以降の良好な資料が発見されている（大場、1968；大川、1998）。例えば、元地遺跡の15例から20例への変遷が想定される。浜中2遺跡でも同時期の資料が層位的に発見されており、既に刻紋・沈線紋土器の10細分を試みている（柳澤、2015：345-355ほか）。そこで大川清の調査資料に注目すると、19例と同じく紡錘状の貼付紋を持つ20例が含まれている。また17例に後続する資料も存在する。ボタン状のポッチと「返り」沈線を持つ23例は、(4)類の11例から14例を介して登場したと考えられる。TP1においても、刻紋・沈線紋土器(4)類の8例→12例→(6)類(21・22)に至る変化が捉えられる。

はたして、ポッチ連繫紋やレンズ状の貼付紋、そして摩擦式浮紋を有する17～19例と20～23例が同期するならば、TP1の17例と擦紋Ⅲのモチーフを折衷した19例のキメラ（折衷）土器：(6)類は同時期であり、10世紀代に属する（モヨロ貝塚「貝層下部」並行）と結論できるであろう。

4. 道央から見た沼浦海水浴場遺跡C3区新資料編年の検証

沼浦海水浴場遺跡C3区の新資料7点は、これまでの分析と対比から刻紋・沈線紋土器の(5)・(6)類期に位置すると考察された。それでは観察フィールドを石狩低地帯へ移し、今度は擦紋土器の側から以上の所見を交差的に検証したい（図9）。

先にUS326資料のうち、18・19例を刻紋・沈線紋土器(5)類に比定した。札幌市K460遺跡（左野、1980：左列）と千歳市末広遺跡（大谷ほか、



1~11・14：香深井1(A) 12・13・17~19・21・22：沼浦海水浴場 15・16：元地 20・23：上泊
 (1)・(3)~(6)：刻紋・沈線紋土器の細分時期

図8. 沼浦海水浴場遺跡C3区新資料の検討(3). C3区キメラ(折衷)土器の編年.

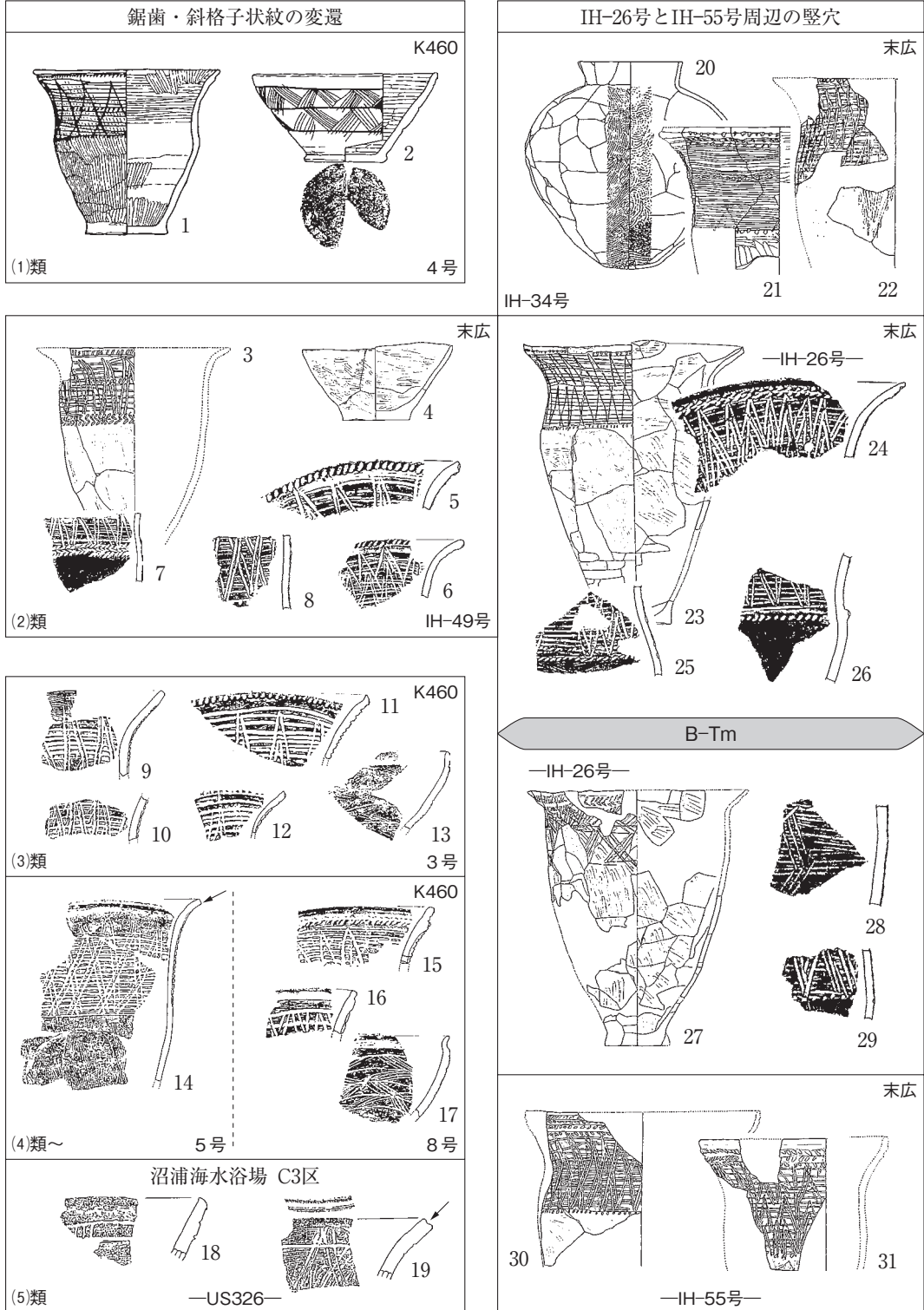


図9. 道央における擦紋Ⅲ期 - 斜格子紋土器群の細分編年と B-Tm の位置づけ.

1981；大谷・田村，1982：右列）の竪穴資料を参照すると，土器系列上では欠落するものもあるが，ほぼ連続的な変遷が次のように捉えられる。

- (a) 擦紋Ⅲ (1) 類 (1：カマド付近床面・2：床よりやや浮く)：4号竪穴 (1例→3例，2例→(+)
→13例)
- (b) 擦紋Ⅲ (2) 類 (3～8)：IH-49号竪穴 (3：カマド袖→12例，5例→？，7・8例→11例)
- (c) 擦紋Ⅲ (3) 類 (9～13)：3号竪穴 (9・10の類似例→14例，11例→15例，12例→16例，13例→17例)
- (d) 擦紋Ⅲ (4) 類 (14，15～17)：5号，8号竪穴 (14例→19例=18例)

末広遺跡のIH-49号竪穴はIH-55号の周りに位置しており，IH-34号に近接する。IH-26号は少し離れた地点にある。これら4軒のうち，IH-26号とIH-34号では，B-Tm（「明茶褐色砂質火山灰」：A.D.937～938年頃比定，福澤ほか，1998）が検出されている。IH-55号はB-Tmの堆積層を欠いているが，「床面出土遺物 (30，31?) の様相から」みて，「隣接する竪穴の中では最も新しい時期に属する」と指摘されている（大谷・田村，1982：151）。その点をふまえて，これらの竪穴資料の変遷を島嶼域の資料を参照してたどると，B-Tmを境界面として，次のような編年が仮設される。

- (a) 擦紋Ⅲ (1) 類以降：IH-34号 (20：床面，21：床より上，22：床面) ≡ K460遺跡4号 (1・2)
- (b) 擦紋Ⅲ (2) 類：IH-49号 (3・4：カマド，5～8)
- (c) 擦紋Ⅲ (3) 類：IH-26号 (23：カマド西側)
- (d) 擦紋Ⅲ (4) 類：IH-26号 (古) 期 (24～26) = K460：5・8号 ←：3号 (9～13)
- (e) 擦紋Ⅲ (5) 類期 (B-Tm 降下)：沼浦海水浴場遺跡 C3区 US326 (18・19)，≡「木質遺物層 (面)」 (図5参照)
- (f) 擦紋Ⅲ (6) 類以降：IH-26号 (新) 期 (27：B-Tm 上) ≡ 28・29，IH-55号 (30：床面，31：床付近?)

ここで (f) 類とした27例の紋様構成は類例に乏しい。胴部には4本描線を重ねた鋸歯状紋を施す。29例は5本描線，28例は3本描線である。両例の出土層は，24～26例と同様に記載されていない。描線扱

いの違いからみると，28例は (5) 類頃に，29例は (6) 類以降に比定されるものと思われる。

それでは，香深井5遺跡3号竪穴の資料 (図5) はどのように対比されるであろうか。覆土中から検出されたものは，先に擦紋Ⅲ (3)～(4) 類期 (1～25) に比定し，魚骨ブロック13は (5) 類 (26・27) も含むとした。この編年案は，図9に示したK460遺跡や末広遺跡の各類と比べても，大きな齟齬はないように思われる。そこで図10に示した資料を用いて，1例に見えるような針葉樹紋の変遷を簡略に検討する。

本例の紋様は，先端を矩形に閉じた針葉樹紋と，おそらく二重「^」状紋を交互に施していると推定される。矩形に閉じずに単線扱いる紋様例は，末広遺跡のIH-16号から8例として発見されている。これと伴出した9・10例の紋様構成は1例に似ている。また擦紋Ⅲ (5) 類期に比定されるB-Tm火山灰 (柳澤，2020b：535-540ほか) の一部は，竪穴中央の床面に接して検出されている。従って，B-Tm以下で出土した7～10例 (壁際) や11例 (床面・直上) は (5) 類期を遡ると考えられる。11例の紋様構成は3号竪穴の5例に先行する特徴を備える。口唇部の刻み目紋は2例に対比されるが，器形は連続的とは認められない。

以上の観察をふまえると，末広遺跡IH-16号の土器群は擦紋Ⅲ (4) 類に比定されると考えられる。

つづいてIH-8号の資料を観察したい。B-Tmの直上から1例に後続するモチーフを施した12例と，単線描きの針葉樹紋を持つ13例が検出されている。両例は他所の資料を参照すると，擦紋Ⅲ (5) 類に比定されるので，1例 ((3) 類) 以降の変遷は，「→ () →12例：擦紋Ⅲ (5) 類 = 13例 (B-Tm 降下，A.D.937～938年頃) →末広IH-55号：図9-31例：擦紋Ⅲ (6) 類以降」，という流れで捉えられる。12例に後続する時期としては，残念ながら纏まりのある資料に乏しい。末広遺跡では14～18例があげられる。図の資料から主要モチーフの変遷をたどると，以下のような流れが想定される。

- (a) 樹枝部が矩形を呈する針葉樹紋
擦紋Ⅲ (3) 類 (1) → (?) →Ⅲ (5) 類 (12：樹幹の3本沈線化) = B-Tm 降下 ≡ 沼浦海水浴場遺跡「木質遺物層」 →Ⅲ (6) 類 (14：矩形

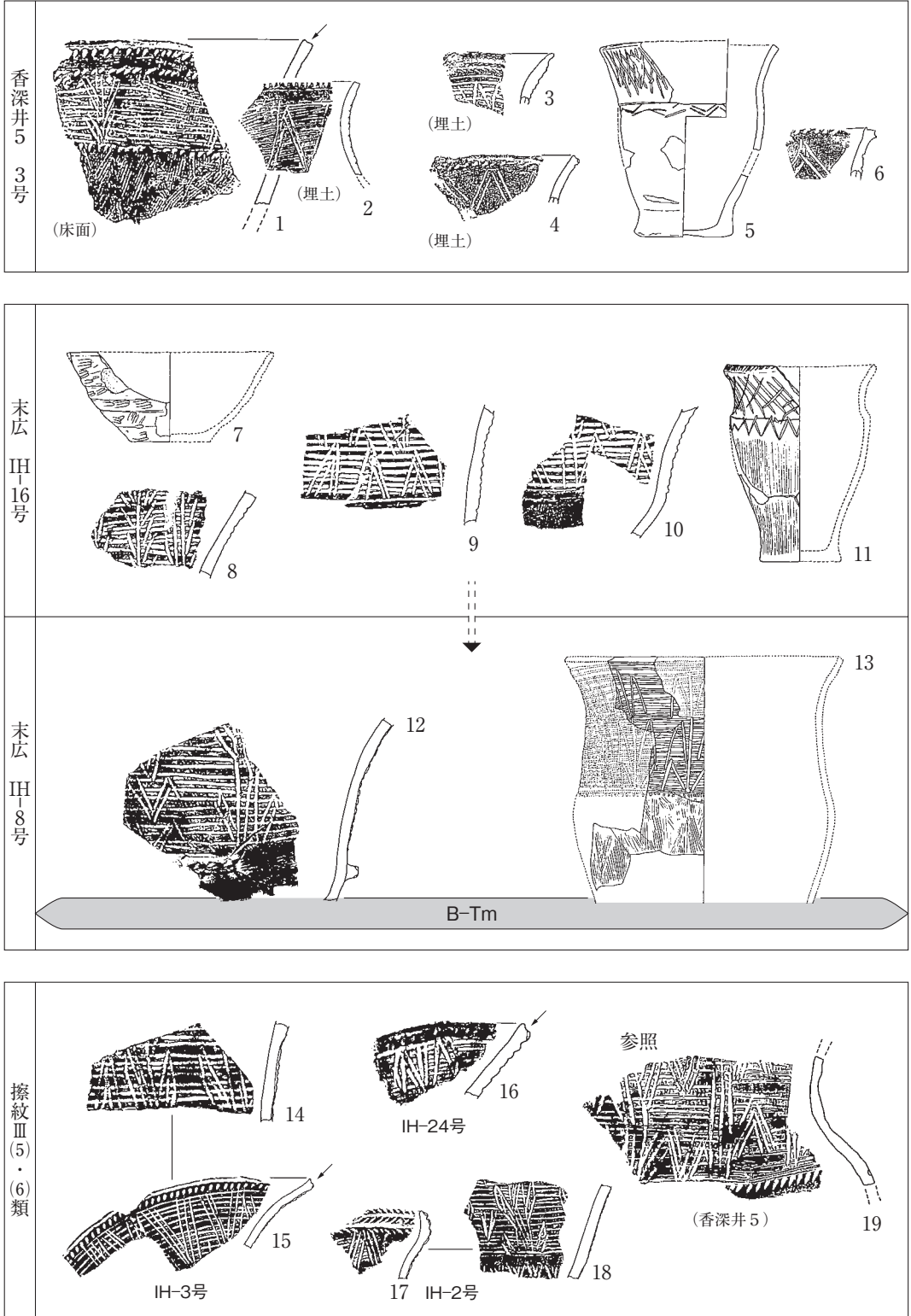


図 10. 道央捺紋Ⅲ期 - 針葉樹紋系土器の細分とB-Tm の位置づけ, 香深井5遺跡 3号竪穴資料の対比.

部に内沈線の挿入、= 15・17:3 本沈線の大きな鋸歯状紋) →Ⅲ (7) 類～ (18:3 本沈線のジグザク紋化)

(b) 二重「V」状紋 (1)

擦紋Ⅲ (3) 又は (4) 類 (1・9・10) →Ⅲ (5) 類 (12:逆位化・矩形部の「折り返し紋」化) →Ⅲ (6) 類 (16:矩形部の複線化, 2 本垂線の挿入)

(c) 二重「V」状紋 (2)

擦紋Ⅲ (3) 類頃 (9・10) → (+) →B-Tm ≒ 擦紋Ⅲ (5) 又は (6) 類 (19:「針葉樹紋」の 3 本線化)

この編年案によると、沼浦海水浴場遺跡 C3 区のキメラ (折衷) 土器 (図 11-17) に見える 3 本沈線モチーフの時期は、他の 6 点とともに擦紋Ⅲ (5) 又は (6) 類に対比される。次に道央の擦紋Ⅲ期編年を検証しつつ、図 11-17 例の位置づけを確かめたい。

石狩低地帯に分布する擦紋Ⅲを一覧すると、17 例の胴部に施紋された 3 本沈線のモチーフに酷似した紋様が見られる。札幌市の K39 遺跡 (藤井編, 2001) では、B-Tm 直上の 6a 層中より 7・8 例が検出されている。前者は 3 本の垂線で胴部を分割し、その間に 2 本の大鋸歯紋を加えて紋様を構成している。それに対して 8 例では、口縁部の刻紋帯が追加されており、胴部のモチーフは 3 本沈線で統一されるという違いがある。従って、相対的に「B-Tm の降下 → 52 号堅穴 (7) → 包含層 (8)」という変遷が想定される。

他方、末広遺跡では、7 例に先行する資料が B-Tm 下に営まれた IH-24 号堅穴から 5 例 (≒ 1 ~ 4・6) として発見されている。これは 7 例と同系列の紋様を 2 本沈線で構成しており、直前段階の擦紋Ⅲ (4) 類に比定される。4 例は、IH-24 号堅穴資料のうち壁際の覆土から発見された。「X」字系と針葉樹系のモチーフを交互に配して紋様帯を構成する。IH-6 号堅穴では、B-Tm 直上から 4 例に後続する 13 例が発見されている。これは B-Tm の降下か擦紋Ⅲ (5) 類期の最中であったことを示唆する貴重な物証として注目される。また出土層は不明であるが、15・16 例などのⅢ (6) 類以降の資料も出土している。13 例に見える針葉樹紋は、柱状部が 3 本沈線で構成されている。この特徴は、先

にⅢ (5) 類とした 7 例 (= 9 例 ← ㊤ 例: 図 4・5 参照) と共通する。それに対しⅢ (6) 類の 8 例 (← 7 例) は、すべて 3 本沈線で構成されており、沼浦海水浴場遺跡 C3 区のキメラ (折衷) 土器 (17) に最もよく対比される。

通説の島嶼域編年 (熊木, 2018a ほか) では、一般に刻紋土器に後続する土器を「沈線文群」(表 1: 13・14, 15 ~ 18) として「7 ~ 8 世紀代」に比定する。しかしながら、道東部の逆転編年案 (図 2・3) と上述の道北・道央資料の分析によれば、擦紋Ⅲ (2) ~ (5) 類までの刻紋・沈線紋土器 (表 1-13 ~ 15) と元地 2 式 (図 5-8 ~ 11, 16 ~ 20, 24 ~ 27) の年代は、B-Tm の降下以前、降下直後、すなわち 10 世紀代前半に比定される (図 6 ~ 13 参照)。従って、通説の編年・年代観と比べると、150 ~ 350 年に及ぶずれが生じることになる。

次に道央・道南から北奥へ移動して、「沈線文群」7・8 世紀代説の齟齬を交差的に検討する。

5. 環津軽海峡圏からサハリン島、北東・内陸アジア編年を結ぶ

石狩低地帯や苫小牧周辺、沙流川の流域に比べると、内浦湾域 (八雲町 ~ 白老町) には擦紋文化期の遺跡が乏しく、土器類の変遷や地域色はよく分からない。図 12 に示した一例は、明治 28 年の『人類学雑誌』に掲載された室蘭港付近 (遺跡) の採集品である (高畑, 1894)。正確な地点や出土状況などは詳らかでない^(註9)。石狩低地帯から沙流川流域の範囲でも、本例に似た資料を寡聞にして知らない。

これまでの引用例もないので、「忘失」された稀少資料と思われる。ここでは、時期的な位置づけと広域対比の「鍵」になる紋様要素を観察したい。

- (a) 口端部に横位に施紋された不均等な「矢羽根」状紋
- (b) 上・下端を二種の沈線で画す 2 本単位の斜格子状紋
- (c) 波状沈線・短刻紋の間に挿入された「//」状紋
- (d) 左傾する短刻紋から垂下された「鎖状」・「懸垂紋」
- (e) 斜格子状紋に施された「車輪」状の小ポッチ

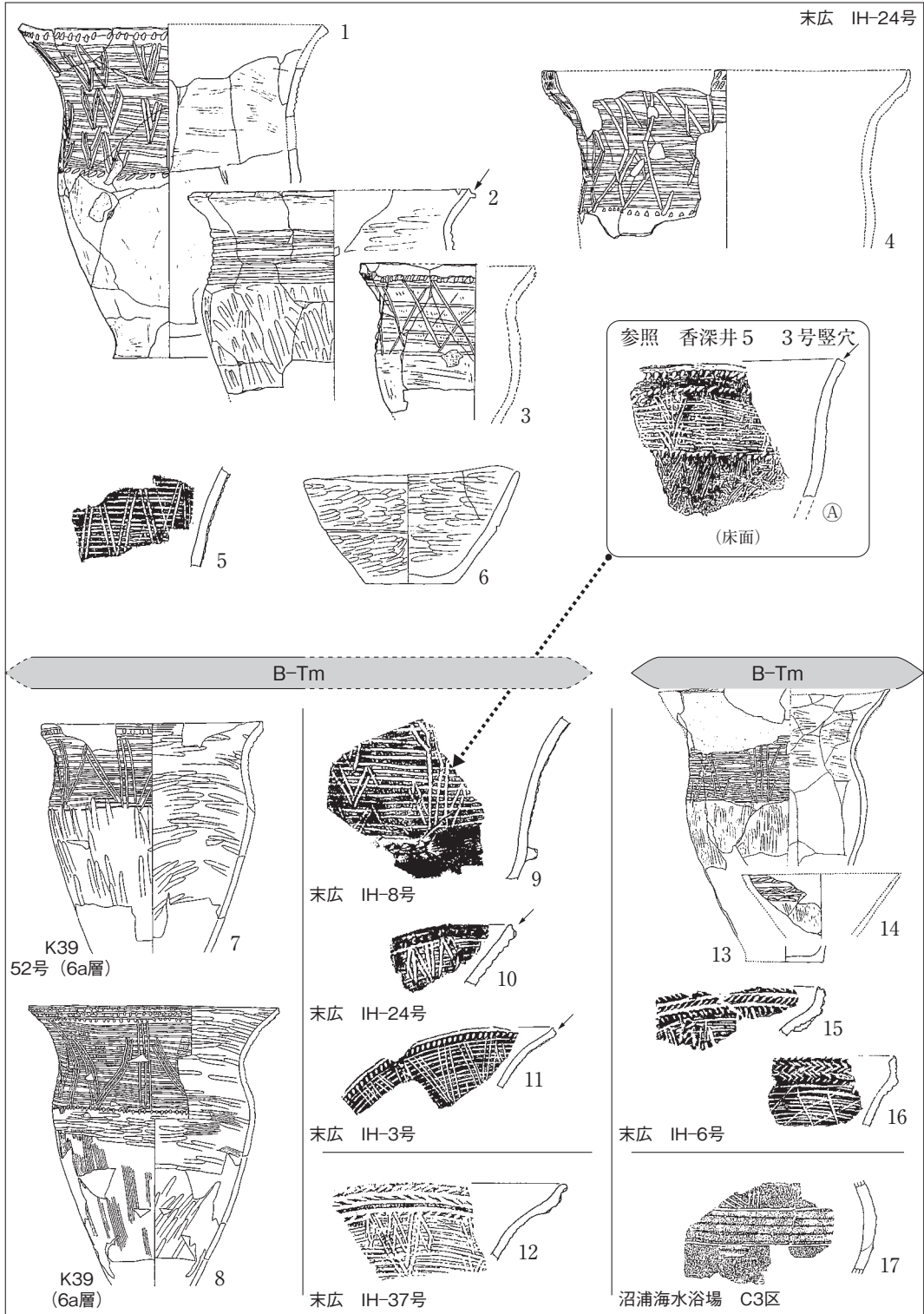


図 11. 道央擦紋Ⅲ期 - 各種紋様系列土器の細分と B-Tm の位置づけ, 香深井5遺跡 3号竖穴資料の対比.

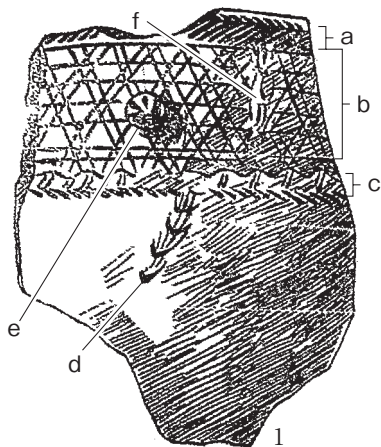


図12. 忘れられた室蘭港付近遺跡の擦紋Ⅲ期資料。

(f) 「ㄩ」・「//」状紋を取り付けた特異なモチーフ
本例は、石板印刷による絵画的な表現で示されている。そのため (a) ~ (f) 項には誤認の可能性がある。類例が発見されれば、その機会に修正するとして、以下、各要素について任意に分析したい。

斜格子状紋 (図13) については、先に K460 遺跡と末広遺跡の資料を用いて細分編年を明らかにした (図6・9)。それをふまえて、余市町大川遺跡 (岡田・宮編, 2000) と札幌市 K39 遺跡 (藤井編, 2001) の資料を細分すると、2 本単位の斜格子状紋 (参照: 図2-4例) は、

- (1) 擦紋Ⅲ (1) 類: 大川遺跡 SH-15 号 (1・2, 3・4)
- (2) 擦紋Ⅲ (2) 類: 末広遺跡 IH-49 号 (5, 6 ~ 8)
- (3) 擦紋Ⅲ (3) 類: 大川遺跡 SH-26 号 (9・10)
- (4) 擦紋Ⅲ (4) 類頃: K39 遺跡 12 号 (13) ^(註10)
- (5) 擦紋Ⅲ (5) 類: 大川遺跡 SH-12 号 (17) = 沼浦海水浴場遺跡 C3 区 US326 (20 = 21)
- (6) 擦紋Ⅲ (7) 類 ~: K39 遺跡 5g 層

という流れで連続的に捉えられる (モヨロ貝塚「貝層下部」並行期)。

擦紋Ⅲ (5) 類に比定した 17 例と 19 例の斜格子状紋は、その先端部が水平沈線を突き抜けて施紋されている。それに対し室蘭港付近遺跡 (祝津貝塚) の 18 例では、水平沈線と波状沈線の間に 2 本単位の斜格子状紋が取められている。そのように紋様帯の上下を画す手法は、不明瞭ながら (7) 類以降の新しい時期にも認

められる。また時期を遡ると、擦紋Ⅲ (3) 類 (12) やⅢ (4) 類 (16) にも用いられている。両例には、口端部下に斜刻線帯をめぐらす資料 (11, 15) が伴っており、室蘭港付近遺跡の 18 例と繋がりが考えられる。

この所見によると 18 例の時期は、大まかに擦紋Ⅲ (4) ~ (7) 類の間に想定される。また水平な画線の扱い方に注意すると、18 例は (5) 類よりも新しく、(6) 類に比定される可能性もある。次に青森湾域に移動して、「島嶼域 - 石狩低地帯」編年の有効性を確認する (図14)。

先の着眼点 (a)・(b) 項の検討によると、室蘭港付近遺跡で採集された資料 (1) は、B-Tm 降下直後の擦紋Ⅲ (6) 類頃に比定された。(c) ~ (f) 項についてはどうであろうか。まず (d) の懸垂紋である。これに近似するモチーフとしては、青森市の新田 (2) 遺跡 (青森市教育委員会編, 2011) の須恵器 (2) に見える「矢羽根」状の懸垂紋が注意される。これは 3 例とともに堅穴から出土したという。蓑島栄紀氏は 2・3 例を五所川原窯産の須恵器と認め、年代は「十世紀半ば ~ 後半」に比定している (蓑島, 2015: 226)。

また、胴部上半に見える「矢羽とおぼしい刻画」は、津軽海峡の対岸から移入された「切斑の「肅慎羽」を意味し、文献に「名羽の中の名羽」、「重宝のなかの重宝」と記された「事情を傍証するもの」" であるという (蓑島, 2015: 227)。「矢羽とおぼしい刻画」、すなわち刻線による「矢羽根」状懸垂紋は、蓑島氏の指摘どおり、北奥や津軽海峡圏以北との矢羽の交易に係わる習俗や儀礼に付随する呪的な意匠紋なのであろう。その意味では、器種と施紋の部位を異にするが、新田 (2) 遺跡の「矢羽根」状懸垂紋は、室蘭港付近遺跡の 1 例に見える鎖状ㄩ・ㄩ懸垂紋に類似した意匠紋と認められる。年代的にも、1 例は B-Tm 以後の擦紋Ⅲ (6) 類頃に比定されるので、蓑島氏が 2 例の須恵器に比定した年代の範囲に収まる。

このように室蘭港付近遺跡の一例 (2) と青森市の新田 (2) 遺跡例 (2 = 3) が、ほぼ同時期に属するならば、擦紋Ⅲ期中頃以降に盛行する「矢羽根」状紋 (6)・(7) も関連性があると言えよう。石狩低地帯・島嶼域の擦紋Ⅲには、ときおり複線の針葉樹紋

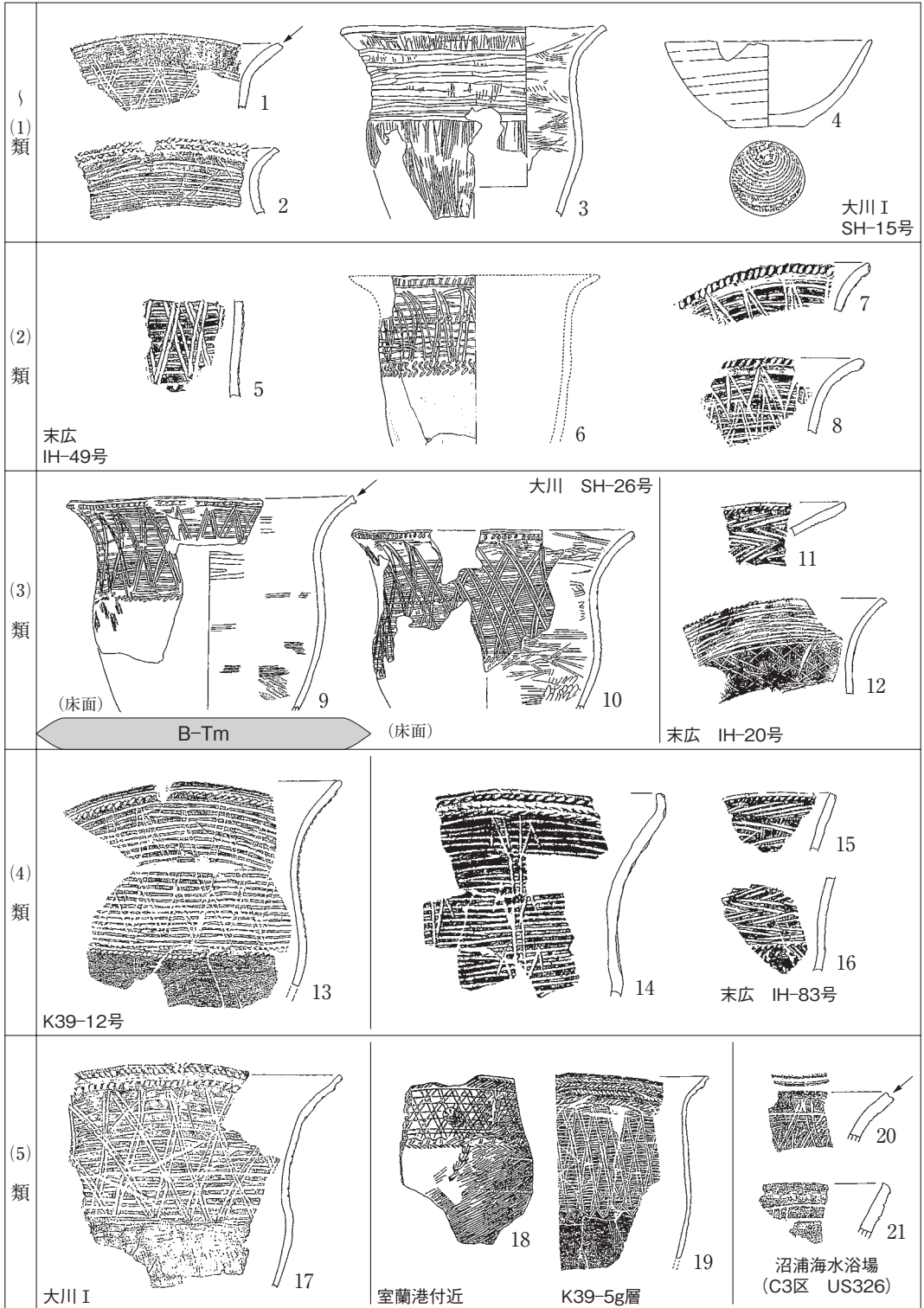


図 13. 道央擦紋Ⅲ期 - 斜格子紋土器の細分から見た室蘭港付近遺跡資料の位置づけ。

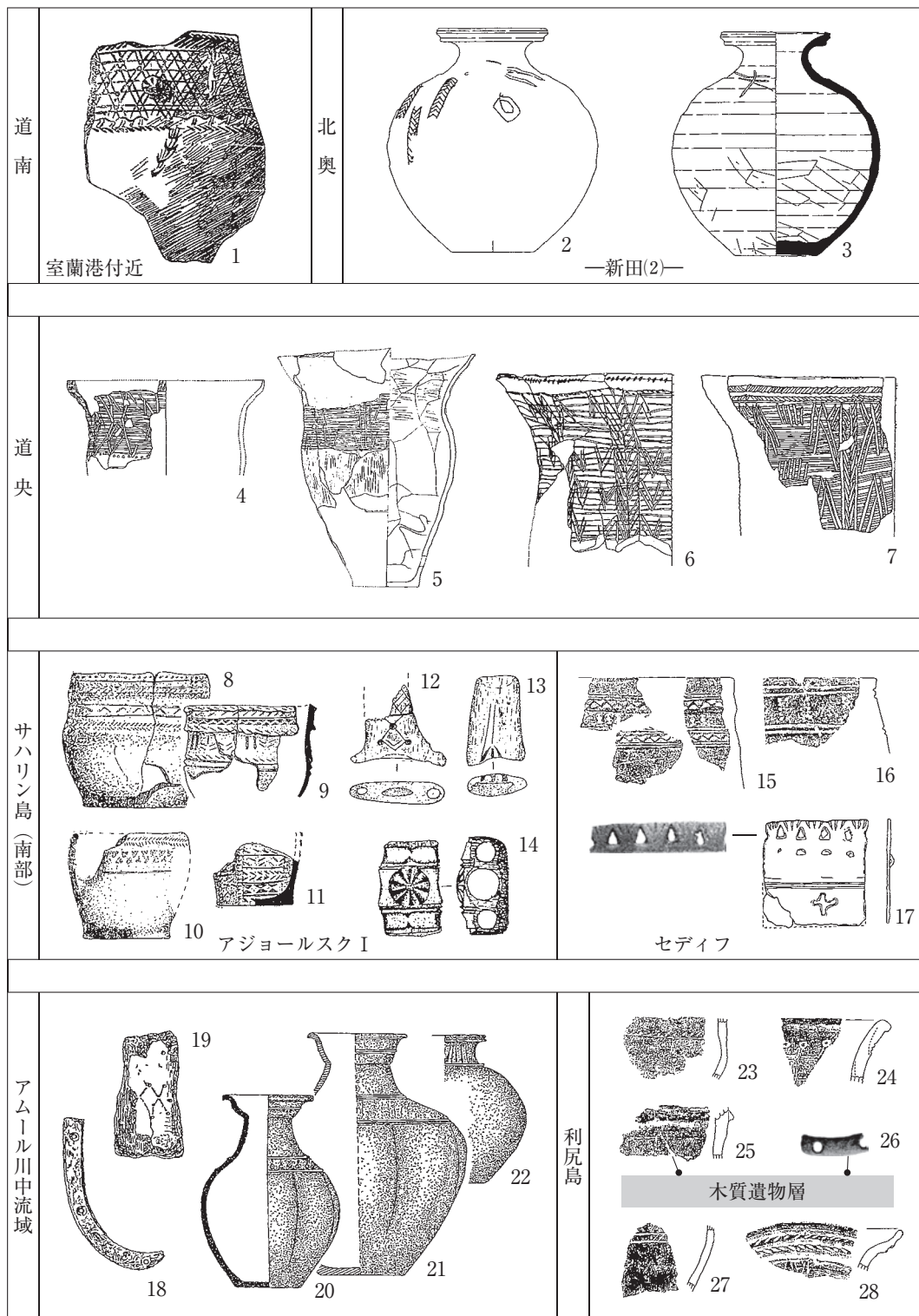


図 14. 五所川原窯址の「矢羽根」状紋から見た北海道・サハリン島・アムール川中流域の対比.

(5) 内にジグザグ紋や菱形状紋^(註11)、矢羽根状の刻線紋を挿入する例がある。千歳市内では、末広遺跡の6例と美沢川流域遺跡群(田口・鈴木, 1996)の7例が代表的である。その位置は、先に図11で引用したIH-24号竪穴の4例(Ⅲ(4)類:B-Tm下)と、6号竪穴の5例(Ⅲ(5)類:B-Tm直上)から容易に捉えられる。6・7例は破片であるが、紋様構成の復元は可能である。6例は、複線による針葉樹紋を反復しており、7例は、複線を用いて「X」字状・針葉樹紋を交互に配列する。紋様系列では4例から7例へ、そして7例は5例以降にIH-83号の一例(図13-14)から変化したと推定される。その通りであれば、6例は擦紋Ⅲ(6)類頃に、7例はⅢ(6)～(7)類頃に比定される。そしてそれらの年代は、B-Tm(A.D.937～938年頃)直上の5例より新しく、10世紀代の中頃～後半に求められるであろう。「矢羽根」を連想させるモチーフの施紋は10世紀代のサハリン島でも盛行する。そうした状況は、石狩低地帯や北奥よりも古いらしく、擦紋Ⅱ期(末)～Ⅲ期並行の初頭には始まるようである。更に、アムール川中流域や渤海上海京龍泉府の陶質土器等に見える「矢羽根」状紋(コルサコフ式並行、柳澤, 2020b:第258図)と並行的に変遷する様子が多くの関連資料から窺える。その一端については、若干の標本例を示して予察的に所見を述べている(柳澤, 2020b:506, 545-548)。

詳しい検討は別の機会を俟つとして、ここでは1例の鎖状 Ψ ・ Ψ 懸垂紋にちなみ、サハリン島で発見された骨製品(12～14)に注目したい^(註12)。12例に見える菱形状の刻線紋は、刻紋土器Aや「変容トロイツコエ式」(柳澤, 2020b:572:第9表)に伴う陶質土器(擦紋Ⅱ並行:9世紀代)にも用いられている。他方、アムール川中流域のコルサコフ式(5)～(6)類の時期にも、例えば19例として存続する様子が観察される(柳澤, 2020b:504-512・533-535・557)。

次に「 ∇ 」状紋を刻する13例である。これに酷似するモチーフは、変容トロイツコエ式～コルサコフ式期(擦紋Ⅱ・Ⅲ並行)の方形帯金具にも用いられている。これは、先の菱形状紋や「鋸」状紋などに続いて、アムール川ルート経由でサハリン島以南への波及が想定される。14例の骨製品は、12・13例と同様に類例を見

ないものである。器体の中央には、やや太い刻線のモチーフが施されている。これは一見すると菊花状に見えるが、三つの「 ∇ 」状紋、又は類「 \wedge 」状紋を略対向させたものと推定される。「 \wedge 」状紋を対向する手法は、今のところアムール川中流域に限定されている。その実例としては、コルサコフ遺跡81号墓のバックルやドゥボーヴォエ遺跡1号クルガンの丸形帯金具などがある^(註13)。しかし、骨製品の類例は今のところ見いだされない。とはいえ、サハリン島南部における「矢羽根」状紋(8・9)の受容や各種スタンプ紋(10・11)の盛行に留意すると、14例の菊花状のモチーフも、アムール川中流域の影響を反映していると推察される。

また、室蘭港付近遺跡の鎖状 Ψ ・ Ψ 懸垂紋は、12・13例に見える「 ∇ 」状紋に刻線を足したものと解釈すれば、その由来が理解しやすいであろう。次に着眼点(f)とした奇妙なモチーフである。その先端部は三叉状、または四叉状に陰刻されているようである。これは、14例の一部に見えるモチーフ扱いと共通する。更に(e)項とした「車輪」状のポッチにも、「 ∇ 」状の刻線が加えられている。不明の部分にも施されているならば、14例に近似した菊花状のモチーフになるであろう。

これらの遠隔地に分布する特異なモチーフは、おそらく10世紀代に展開されたサハリン島から島嶼域・石狩低地帯、そして環津軽海峡圏や秋田城以南の地域、そして大陸側を結ぶ広域的な交易活動に付随するものではなかろうか。

さて、アジョールスクI遺跡(Шубин, 1979)の骨製品(12～14)は包含層から出土したものである。その周辺から出土した土器は、大部分が「アジョールスク系土器群B」(柳澤, 2020b:544)の古手、すなわち擦紋Ⅲ・元地2式・刻紋・沈線紋土器、南貝塚2式(柳澤, 2015:361-365)の「古い部分」に比定される。そのうち10・11例には、南貝塚2式で多用される三角スタンプ紋が併用されている。これは一種のキメラ紋様と認められよう。他方8・9例の口縁部には、横位の「矢羽根」状紋が施されている。これはコルサコフ式(1)～(3)類にも用いられている(柳澤, 2020b:第258図)。その年代は筆者の編年観(柳澤, 2020b)によると、B-Tmの降下(A.D.937～938年)以前の時期に比定される。

アニワ湾内のアジョールスクI遺跡に対して、東海岸に立地するセディフ遺跡(熊木ほか, 2007)では、より新しい時代に属するポスト「江の浦B式」系の土器群(15・16)が発見されている。15例には、三角スタンプ紋や多条沈線紋が施されている。16例と共に、その器形は伊東信雄の「南貝塚式」(伊東, 1942)と明らかに異なる。時期的には両例の仲間と伴出した17例の方形帯金具からみて、10世紀の中頃に位置すると考えられる(註14)。

そこで帯金具の装飾に注目すると、図の上端には「V」状の刻線が施されている。アジョールスクI遺跡の13例からセディフ遺跡の17例にいたるまで、サハリン島南部に「V」状モチーフが存在したとすれば、それらと親縁な要素を用いた懸垂紋が、環津軽海峡圏に登場しても何ら不思議ではない。新田(2)遺跡の2例も同じ頃に登場した「矢羽根」状の懸垂紋である。室蘭港付近遺跡の1例もサハリン系の「V」・「車輪」状のモチーフを併用した稀有の資料と思われる。これらも10世紀代の中頃に比定される。遠隔地ながらも装飾手法や要素に見える類似性は、サハリン島南部と道央・道南・北奥を結ぶ交易活動の活発化を反映するものと考えられる。ちなみに石狩低地帯の小樽市では、かつて新岡武彦によって「南貝塚式」(越田編, 2003: 102・9・10)の破片が採集されている。その内の10例の紋様構成は、セディフ遺跡の16例に近似する。忍路とされる採集場所には疑問もあるようであるが、室蘭港付近遺跡や新田(2)遺跡などの資料をふまえると、上述の仮説を傍証する「鍵」資料として特に注目しておきたい。

以上のように通説の環オホーツク海編年を離れて観察すると、図14に掲げた1例と2・3例、末広遺跡の5・6例、そしてセディフ遺跡の15・16例などは、擦紋Ⅲ(5)～(6)類期並行のコルサコフ式(5)・(6)類と同期する可能性がある。そこで、あらためて沼浦海水浴場遺跡の新資料に戻りたい。A3区においてB-Tmに略対比される「木質遺物層」の上位から刻紋・沈線紋土器(6)類(23・24)、直上から元地2式(6)類(25)とともに26例の「有孔金属製品」が検出されている。それに類するものは、コルサコフ遺跡4号墓の追善面より18例として夙に発見されて

おり、他の類例も存在する。20～22例の墓壙副葬土器は比較材料に乏しく時期を特定できないが、コルサコフ式(5)類又は(6)類に属するものと考えられる(柳澤, 2020b: 557)。

その時期は、筆者の擦紋Ⅲ細分案によると、末広遺跡IH-6号竪穴の(5)類(5)、もしくは(6)類(6)に対比されるので、擦紋Ⅲに見える「矢羽根」状紋の流行(6・7)とも重なる。更に新田(2)遺跡の「矢羽根」状懸垂紋(2)や室蘭港付近遺跡の鎖状 Ψ ・ Ψ 懸垂紋とも同期することが確認される。

ここで、広い視野から着眼点(f)項の位置を再確認したい(図15)。ついで契丹系の盤口瓜稜壺に見える「矢羽根」状の懸垂紋をとりあげ、その由来と意義に言及して本稿を締めくくりたい。

室蘭港付近遺跡の1例は不思議な擦紋土器(Ⅲ)である。先の検討によると、「V」状紋や菊花状を呈した対向「^」状紋、そして鎖状 Ψ ・ Ψ 懸垂紋などは、いずれもサハリン島のアジョールスク系土器B群に由来する可能性が想定された。ただし、鎖状 Ψ ・ Ψ 懸垂紋を数珠繋ぎして間欠的に懸垂する紋様手法は、今のところサハリン島では知られていない。新田(2)遺跡は、内浦湾から津軽海峡を渡り青森湾奥に立地する拠点的な遺跡である。そこから出土した須恵器に見える「矢羽根」状紋は、肩部から胴部の中央にかけて懸垂されており、遙かに離れた室蘭港付近遺跡の1例との類似性は疑えない。

本例については先に擦紋Ⅲ(6)類に比定したが、道央におけるB-Tm降下年代を参照するとA.D.940～950年代の範囲に収まると思われる。2例に対して蓑島氏は、「十世紀半ば～後半」の年代を与えており(蓑島, 2015: 226)、それにしたがうと1例と2例はほぼ同時代の所産と捉えられる。

五所川原窯産の須恵器と内浦湾域の擦紋Ⅲに見える二種の懸垂紋は、どのような事情から施されたのであろうか。サハリン島と北奥を結ぶ接触・交流があり、とりわけ様々な特産品をめぐる盛んな交易活動、それに付随する祈りや儀式的存在を想起させる証左と言えるのではないか。そのような解釈をふまえて、幅広い斜格子紋帯下に施された副紋様帯に注目したい。その上部には小波状紋が施される。また下端には、部分的に

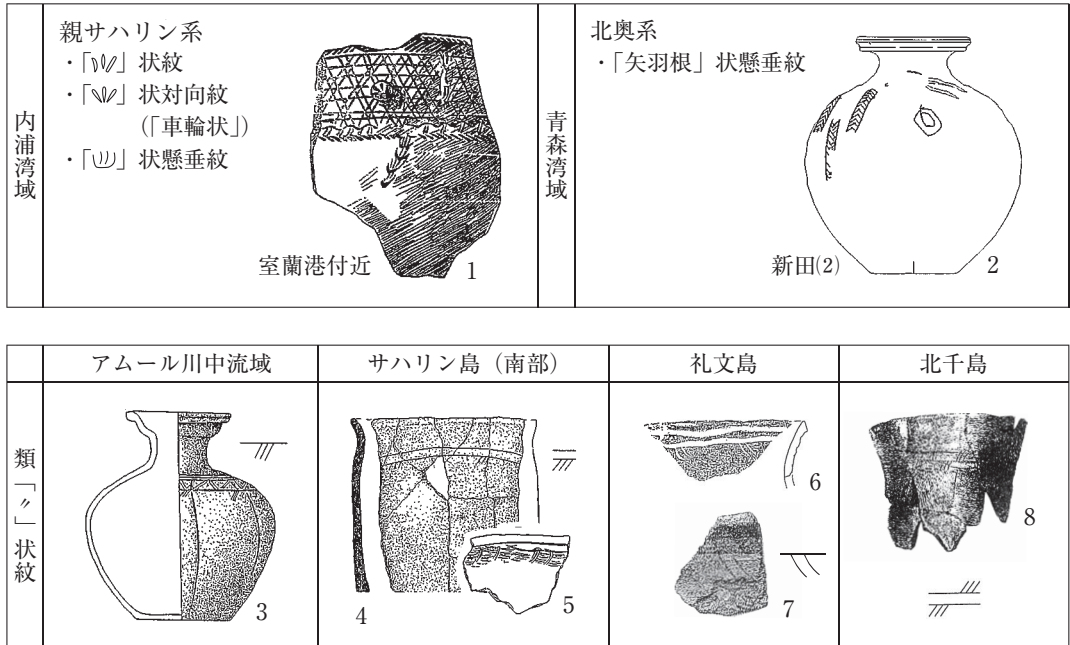




図 15. 10 世紀代中葉の「//」状紋と特異な「鎖状・・矢羽根」状懸垂紋の対比。

小さな矢羽根状を呈する短刻紋帯も見える。更にそれらの間には、擦紋Ⅲ期に余り見かけない「//」状紋が波状紋に対して挿入されている。これはいずれに由来するモチーフなのであろうか。類例を探索すると、アムール川中流域から北千島の占守島までのあいだで、3～8の実例が見いだされる。2本タイプのもは、礼文島の香深井1(A)遺跡で3点、アニワ湾でも1点が発見されている。3本タイプは、遙か北千島の占守島とサハリン島のテルペニア湾、そしてアムール川中流域にも見られる(柳澤, 2020b: 第238・239図)。これに室蘭港付近遺跡の2本タイプ(1)が加わる。

テルペニア湾の4例と占守島の8例は、礼文・利尻島との接触・交流を示唆する資料と伴出しているので、道北の島嶼域との強い結びつきが窺える。また、刻紋・沈線紋土器(5)類期における最大の拠点遺跡である香深井1(A)遺跡において、(4)・(5)類期の「//」状紋が発見されていることは、決して偶然ではないだろう。口頸部や胴部に見える分割垂線紋(柳澤, 2020b: 470-479)もまた、礼文島から占守島への波及が認められる。この点も念頭におくと、道北島嶼域の擦紋集団と繋がりを有する刻紋・沈線紋土器の使用者が千島(クリル)諸島やサハリン島への交易活動に携

わっており、その反映としてサハリン島の4・5例や占守島の8例などが現地で作られたと推察される。そのように捉えると、室蘭港付近の1例に見える「//」状紋も、青森湾域の新田(2)遺跡と内浦湾域から渡島半島や石狩低地帯を経由して、道北の島嶼域と密接に繋がる広域的な交易網の在り方を反映していると解釈できる。

この仮説が妥当であれば、1例に施された親サハリン系の要素、すなわち「車輪」状のポッチなども、南貝塚2式(並行)の採集資料(越田編, 2003: 102-9・10)とともに、サハリン島アニワ湾域と環津軽海峡圏との繋がりを示唆するものと評価される。

以上の観察によると、石狩低地帯の擦紋Ⅲを母体とする室蘭港付近遺跡の1例には、親サハリン系と島嶼域系、また北奥系の要素が併用されていると考えられる。本例は今まで「忘失」されていたが、渤海国の滅亡前後における「日本道」を介した交易活動の失われた実態を解明するうえで、貴重な物証として評価すべきものではなかろうか。

それでは、モヨロ貝塚の11号竪穴で発見された10世紀代末頃の「遼時代の素焼土器」(柳澤, 2015c: 491-516, 2020b: 543-544)は、上述の交易圏と大陸側における通商・交易ネットワークの結びつきのな

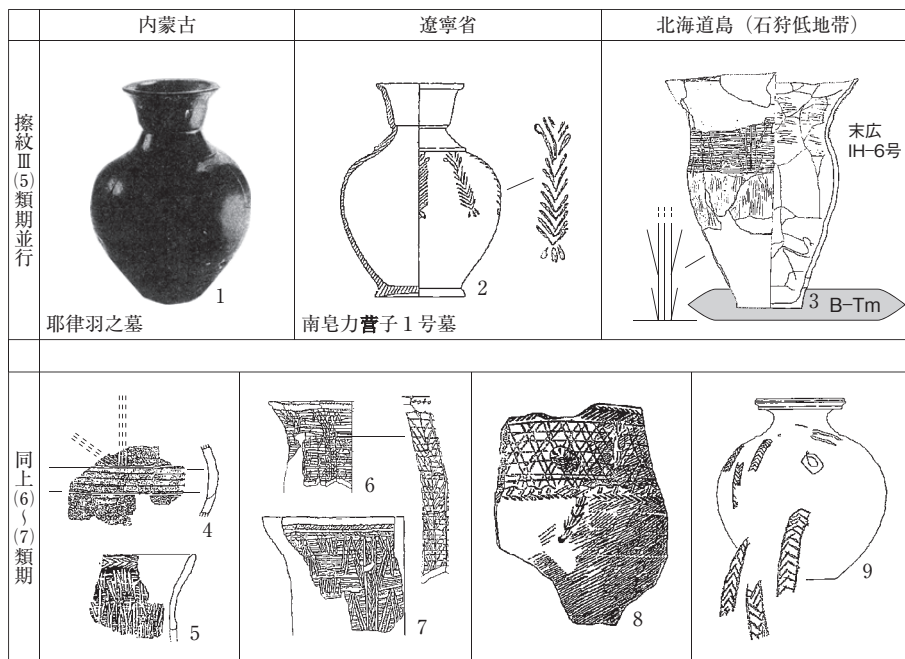


図 16. 10 世紀代中葉頃の「矢羽根」状懸垂紋と縦・横位「矢羽根」状紋の広域対比.

かで、どのように招来されたのであろうか (図 16)。本稿では、その点を具体的に検討することは控えるとして、それに先立って擦紋Ⅲ (5) 類期に対比される遼寧省阜新市の南皂力營子 1 号墓 (遼寧省文物考古研究所阜新市文物組, 1992) の契丹土器 (2) にあらためて注目したい。奚から統治権を奪った契丹によって、唐代營州の地には多くの契丹系貴族の墳墓が営まれている。南皂力營子 1 号墓はそうした一例である。多くの副葬品とともに、2 例の盤口瓜稜壺が発見されている。口縁部から底部にいたるまで契丹土器の規範に則り作出されているが、肩の稜線から懸垂された「矢羽根」状紋が特異な一例として注目される (柳澤, 2015: 467-471)。時期的には、内蒙古で発見された東丹国宰相の耶律羽之墓 (A.D.942 年埋葬, 内蒙古自治区文物研究所, 1996) から出土した盤口瓜稜壺 (1) に略対比され、石狩低地帯では B-Tm 直上で出土した末広遺跡 IH-6 号の擦紋Ⅲ (5) 類などに並行すると考えられる (柳澤, 2020b: 547-548)。

このような対比案をふまえると、上京龍泉府例をはじめとする関連資料の分布状況からみて、渤海滅亡後に遼東・營州方面から「日本道」を介して、石狩低地帯や環津軽海峡圏、秋田城以南を結ぶ交易ネットワークが復

活していたと想定される。またそれに付随して、特異な懸垂紋を呪的に扱う習俗や儀礼が交易・通商に携わる様々な人々の間で受容されていた状況も推察される。

南皂力營子 1 号墓の盤口瓜稜壺の年代は、筆者の編年案によると 10 世紀の中葉に比定される (柳澤, 2015, 2020b)。既に、渤海国を占領した契丹勢力は遼東方面へ遷都しており、他方、それに呼応して旧渤海国内では種々の動きがあったと推測される。しかし、その経緯や事情はほとんど解明されていない。「日本道」の行政上の拠点とされたクラスキノ城址は、近年に報告された大量の土器資料を一覧すると、契丹侵攻 (A.D.925 年) 後も活動を停止していない。従って、南皂力營子 1 号墓に見える「矢羽根」状の懸垂紋に留意すると、室蘭港付近の集団や青森湾域の勢力 (新田 (2) 遺跡)、秋田城方面とも、東丹国時代に交易・通商上の繋がりがあったと想定される。

その時期は、To-a (A.D.915 年) や B-Tm (A.D.937 ~ 938 年頃) の降下と渤海国の滅亡を含む 10 世紀代前半期、すなわち刻紋・沈線紋土器 (「沈線文系土器」)・擦紋Ⅲ・元地 2 式の (1) ~ (6) 類が、北海道島で盛行していた時代と部分的に重なる。その時代を表 1 に見える通説編年では、相変わらず「7 世紀後葉 ~ 8 世

紀前葉」に比定している。この年代観は、はたして交差編年法を用いて大陸側で証明できるのであろうか。

おわりに

香深井1(A)遺跡で「オホーツク式土器」に伴って発見された古式の土師器は、通説の「オホーツク式土器」編年観(「刻文土器→沈線文系土器」)・年代観を根本から支える「鍵」資料として、元地遺跡の魚骨層Iの混在土器群とともに、今なお高く評価されている。しかしながら、「オホーツク式土器」と土師器の「共伴」説に依拠する編年・年代観は、各土器群の小細別編年とキメラ(折衷)土器、To-a・B-Tm降下年代を援用した広域編年、大陸側の文物との交差対比によって、200～300年のずれを有することが、本稿の再検証によって確認された。その有効性については、更に大陸伝来のベルト金属製品などについて、同じく交差編年法を適用して闡明しなければならない。道北の島嶼域では、そうした稀少な文物は出土していないが、なお未解決の課題がいくつも残されている。道北島嶼域の遺物を媒介として、北方先史考古学の「忘失」された原点を甦らせる作業は、遙かに「肅慎・挹婁」の故地まで、北の「日本道」を介して繋がるように思われる^(註15)。

謝辞

本稿の作成に際して利用した香深井1(A)遺跡と香深井5・6遺跡の資料実査については、天野哲也・小野裕子氏と藤沢隆史・高橋鵬成氏のお世話になりました。査読と校正は多忙の最中ながら、長山明弘氏に願いました。それに先立ち、本稿で検討した室蘭港付近遺跡をはじめ、学史上の「忘失」された資料についても、懇切な教示を受けました。末筆ながらここに記して、皆様に感謝を申し上げます。

註

1 環オホーツク海域の広域編年については、2015年以降では、ほぼ熊木俊朗氏の発言(熊木、2018a・b, 2021ほか)に限られるようである。それらを通読すると、2020年以降も改訂を要しないと判断していることが分かる。その根拠としては、ウトロチャシコツ岬上遺跡で「オホーツク式土器」

に伴出した「神功開宝」(A.D.765年初鑄)が特に重要視されている。

- 2 以下、擦紋土器の細分(擦紋II～IV)については、佐藤達夫の編年案(佐藤、1972)に準拠する。
- 3 モヨロ貝塚・ウトロチャシコツ岬下遺跡・下鑑別遺跡の編年は、ここで初めて述べるものではない。通説の北方編年に疑問ありと初めて発言した際に、可能な限り詳しい検討を試みている(柳澤、1999b, 2008:16-24, 31-38, 64-68)。表1の編年観・年代観との著しい齟齬は、この1999年の「逆転編年」説の提唱に始まる(柳澤、2020b:25-註9, 375-註2;熊木1995:17-56:セリエーション編年法の実践例)。
- 4 今では「忘失」されているが、1948年当時には、「擦紋土器」と「オホーツク式土器」は並行関係にあり、網走周辺では擦紋人とオホーツク人が同時代に「棲み分け」生活していた状況が想定されていた(名取、1947, 1948a, b;児玉、1948, ほか)。こうした考案は、第一にモヨロ貝塚の「貝層」内で擦紋土器が共伴したこと、第二には、擦紋・オホーツク両土器の特徴を備えたキメラ(図2-4)が貝層中で発見されたこと、更に「砂層→貝層→黒土層」の層序に合致するように、土器と人骨形質が相関的に変化する状況が捉えられたことなどを根拠にしていたと考えられる(柳澤、2020b:228-239, 380-385ほか)。
- 5 床面出土例としては、図4-1例のみが報告された。4～12例は実査で確認した未発表資料である。なお10例に見える口唇部の凹溝(凹線)は、擦紋III(新)期(図2-21, 図3-23, 図6-2)にも存続する(柳澤、2008:第21図6⇨7～11⇨第22図1～10, 6・27図参照)。
- 6 図4の2例は「発掘区出土土器」として報告されており、実査の際に3号堅穴の床面資料であることを確認した。
- 7 図5の1～11例と21～27例は未報告資料である。そのうち12～20例は「発掘区」資料として掲載されている。15・16・18・20例の出土層位は付表に見えるが、その他は実査の際に確認した。
- 8 図5の31例について、柳澤(2020b:535-

- 540) では擦紋Ⅲ (3) 類に比定したが, 石狩低地帯の資料を見直すと, (4) 類に位置する可能性も想定される。資料に乏しくよく分からないが, 本稿では幅を持たせて 31 例を (3) ~ (4) 類とした。
- 9 本資料は, 幸い長山明弘氏より柳澤 (2020b) の校正中に提供され, 本稿で初めて引用するに至った。また本稿の査読中には, 「室蘭港付近遺跡」は絵鞆半島の先端に存在した「祝津貝塚」に相当する可能性が高いとの教示を受けた。
- 10 報告書によると K39 遺跡の 12 号竪穴は, B-Tm (6c 層) 後に堆積した「6a 層時期」には既に埋没しているものとされている。層序的には擦紋Ⅲ (5) 類期を遡り, (4) 類頃に位置する竪穴と考えられる。型式学的にも矛盾しないので, ここでは暫定的にそのように捉えた。
- 11 島嶼域における菱形状紋の実例としては, 香深井 5 遺跡の一例 (内山ほか, 2000: 第 55 図 37) があげられる。
- 12 図 14-12・13 の骨製品と伴出した土器群については, 柳澤 (2020a・b) で述べた北海道島との同時代関係をふまえて, 交差編年の観点から検証が必要である。
- 13 アムール川中流域の各種金属製品の編年については, 本邦および北東アジアを視野にいれた統合的な見直しが求められる。
- 14 セディフ遺跡の方形帯金具はアムール川中流域と形制をやや異にしている。目下の大まかな対比によると, これはコルサコフ式中頃 (渤海国の滅亡: A.D.926 年以後) に位置するように思われる。
- 15 先史考古学上のいわゆる「種族論」については, 北日本の縄紋人と後代の蝦夷・エゾ・アイヌ, また肅慎・邑婁などの関係性を念頭において, 将来的な編年学・年代学上の課題として, かつて先行的に言及した (柳澤, 2006: 347-348, 2008: 590-593 ほか)。

参考・引用文献

馬場脩, 1936. 北千島古守島の第 2 回考古学的調査。人類学雑誌, 51 (3): 74-115。
千葉大学文学部考古学研究室編, 2014. 北海道礼文町

浜中 2 遺跡第 3 次発掘調査概報, 同研究室, 146pp。
藤井誠二編, 2001. K39 遺跡第 6 次調査, 環状通整備事業に伴う発掘調査。札幌市文化財調査報告書 65 (1-4 分冊)。札幌市教育委員会。
福澤仁之・塚本すみ子・塚本斉・池田まゆみ・岡村真・松岡裕美, 1998. 年縞堆積物を用いた白頭山, 苫小牧火山灰 (B-T m) の降灰年代の推定。汽水域研究, (5): 55-62。
後藤寿一, 1937. 札幌市及其附近の遺跡・遺物の二三に就いて。考古学雑誌, 27 (9): 595-601。
伊東信雄, 1942. 樺太先史時代土器編年試論。東北帝国大学史学会編, 喜田博士追悼記念国史論集: 19-44. 大東書館。
岩城克洋・北沙織・土肥幸子・藤原吉希・柳澤清一・山谷文人, 2017. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第 1 次発掘調査報告書。礼文・利尻島遺跡調査の会, 151pp。
川名広文・高島孝宗, 2010. 音標ゴメ島遺跡分布調査報告。枝幸研究, (2): 1-18。
菊池徹夫, 1972. トビニタイ土器群について。東京大学文学部考古学研究室編, 常呂: 447-461. 東京大学文学部。
児玉作左衛門, 1948. モヨロ貝塚。北海道原始文化研究会出版部, 100pp。
駒井和愛編, 1964. オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 (下, 別篇)。東京大学文学部, 369pp。
越田賢一郎編, 2003. 後志管内の遺跡分布。奥尻町青苗砂丘遺跡 2 (重要遺跡確認調査報告書 3): 102-104. 北海道立埋蔵文化財センター。
熊木俊朗, 1995. 第 1 節土器。利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書: 1-120. 利尻富士町教育委員会。
熊木俊朗, 2005. 江の浦式土器編年の再検討。アムール河口部ニコラエフスク空港 1 遺跡の成果をもとに, 間宮海峽先史文化の復元と日本列島への文化的影響, ニコラエフスク空港 1 遺跡の発掘調査報告とその成果に関する考古学論文集, 東京大学常呂実習施設研究報告 2: 185-211. 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
熊木俊朗, 2018a. オホーツク海南岸地域古代土器の研究。北海道出版企画センター, 320pp。

- 熊木俊朗, 2018b. モヨロ文化市民講座オホーツク文化調査の今昔, 70年前のガラス乾板と2年前の発掘調査(付. 配布資料). 網走市教育委員会. 6pp.
- 熊木俊朗, 2021. プロローグ 横浜ユーラシア文化館・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設編, オホーツク文化あなたの知らない古代: 1-8. 横浜ユーラシア文化館ほか.
- 熊木俊朗・福田正宏・柿田朋広・森岬子・宇田川洋・A.A. ワシレフスキー, 2007. 追加資料: セディフ1遺跡の出土資料再報告, 極東ロシアにおける新石器時代から鉄器時代への移行過程に関する考古学的研究, 東京大学常呂実習施設研究報告(3): 106-112. 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設.
- 前田潮・藤沢隆史ほか, 2001. 北海道礼文町香深井6遺跡発掘調査報告書1989-1999. 礼文町教育委員会. 174pp.
- 前田潮・山浦清編, 1992. 北海道礼文町浜中2遺跡の発掘調査. 礼文町教育委員会. 173pp.
- 松谷純一・上屋真一, 1988. 北海道恵庭市中島松6・7遺跡発掘調査報告書. 恵庭市教育委員会. 357pp.
- 蓑島栄紀, 2015. 「もの」と交易の古代北方史, 奈良・平安日本と北海道アイヌ. 勉誠出版. 388pp.
- 名取武光, 1947. 最寄貝塚. あんところぼす, 2(4):18.
- 名取武光, 1948a. 北海道モヨロ貝塚とオホーツク式文化. 民族学研究, 13(1):312-314.
- 名取武光, 1948b. モヨロ遺跡と考古学. 私たちの研究. 札幌講談社. 214pp.
- 名取武光・大場利夫, 1964. モヨロ貝塚の文化遺物. 駒井和愛編, オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下巻: 別篇): 42-63. 東京大学文学部.
- 新岡武彦・宇田川洋編, 1992. サハリン南部の考古資料. 北海道出版企画センター. 326pp.
- 大場利夫, 1961. モヨロ貝塚出土の土器 二, 所謂前北式・後北式・擦文式土器. 北方文化研究, (16): 143-178.
- 大場利夫, 1968. 北海道周辺域に見られるオホーツク文化, II 礼文島・利尻島. 北方文化研究, (3): 1-44.
- 大井晴男, 1970. 擦文文化とオホーツク文化の関係について. 北方文化研究, (4): 21-70.
- 大井晴男, 1972. 礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について, 擦文文化とオホーツク文化の関係について(補論2). 北方文化研究(6): 1-36.
- 大井晴男, 1973. 附オホーツク式土器について. 大場利夫・大井晴男編, オンコロマナイ貝塚, オホーツク文化の研究1: 253-273. 東京大学出版会.
- 大井晴男・大場利夫編, 1976・1981. 香深井A遺跡(上・下). 東京大学出版会.
- 岡田淳子・宮宏明編, 2000. 大川遺跡における考古学的調査I, 余市町教育委員会. 468pp.
- 大川清, 1998. 北海二島, 禮文・利尻島の考古資料(手控・拓図). 窯業史博物館. 130pp.
- 大谷俊三・田村俊之・西蓮寺健, 1981. 末広遺跡における考古学的調査(上), 千歳市文化財調査報告書VII. 千歳市教育委員会. 196pp.
- 大谷俊三・田村俊之, 1982. 末広遺跡における考古学的調査(下), 千歳市文化財調査報告書VIII. 千歳市教育委員会. 590pp.
- 礼文・利尻島遺跡調査の会編, 2018. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡(第2次)・沼浦遺跡(第1次)発掘調査報告書. 同会. 200pp.
- 佐藤達夫, 1972. 擦紋土器の変遷について. 東京大学文学部考古学研究室編, 常呂: 462-488. 東京大学文学部.
- 沢四郎・宇田川洋・豊原熙司, 1971. 弟子屈町下鐘別遺跡発掘報告. 弟子屈町教育委員会. 20p.
- 高畑宜一, 1894. 石狩川沿岸穴居人種遺跡. 東京人類學會雑誌, (103): 2-17.
- 高畑宜一, 1895. 胆振國海岸古跡. 東京人類學會雑誌, (117): 99-111.
- 田口尚・鈴木信, 1996. 千歳市美々8遺跡低湿度部・美々8遺跡, 美沢川流域の遺跡群XVIII(北海道埋蔵文化財センター調査報告書102). 北海道埋蔵文化財センター. 489pp.
- 種市幸生・内山真澄・荒川暢雄, 1997. 礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書, 礼文町総合体育館建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書. 礼文町教育委員会. 123pp.
- 塚本光司, 2007. 石狩低地帯における擦文文化の成立過程について. 天野哲也・小野裕子編, 古代蝦

- 夷からアイヌへ：167-189. 吉川弘文館.
- 内山真澄・熊木俊朗・藤沢隆史, 2000. 礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書(2). 礼文町教育委員会. 259pp.
- 宇田川洋編, 1981. ウトロチャシコツ岬西側低地の調査, 河野広道ノート考古篇1:157-169. 北海道出版企画センター.
- 上野秀一, 1980. K460 遺跡. 札幌市文化財調査報告書 22. 札幌市教育委員会. 254pp.
- 柳澤清一, 1999a. 北方編年小考, ソーメン土器とトビニタイ・カリカウス土器群の位置, 茨城県考古学協会誌, (11): 77-92.
- 柳澤清一, 1999b. 北方編年研究ノート, 道東「オホーツク式」の編年とその周辺. 先史考古学研究 (7): 51-99. 阿佐ヶ谷先史学研究会.
- 柳澤清一, 2006. 縄紋時代中・後期の編年学研究, 列島における小細別編年網の構築をめざして (千葉大学考古学研究叢書3). 平電子印刷所. 940pp.
- 柳澤清一, 2008. 北方考古学の新天地 - 北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し -. 六一書房. 672pp.
- 柳澤清一, 2011. 北方考古学の展開 - 火山灰・蕨手刀をめぐる編年体系の見直しと精密化 -. 六一書房. 400pp.
- 柳澤清一, 2015. 北方考古学の新潮流 - 「逆転編年」説の検証と「オホーツク文化」年代観の改訂 -. 六一書房. 626pp.
- 柳澤清一, 2017. 礼文・利尻島編年の新検討 - その(1) 香深井5遺跡を中心として -. 利尻研究, (36): 47-71.
- 柳澤清一, 2018. 礼文・利尻島編年の新検討 - その(2) 亦稚貝塚の資料から (1) -. 利尻研究, (37): 57-82.
- 柳澤清一, 2019. 礼文・利尻島編年の新検討 - その(3) 亦稚貝塚から沼浦海水浴場遺跡へ. 利尻研究, (38): 67-80.
- 柳澤清一, 2020a. 道北の島嶼域から道央・道南・道東とサハリン島を結ぶ擦紋II並行期編年の検討 - 沼浦海水浴場遺跡の新発見資料から -. 先史考古学研究, (13): 159-189.
- 柳澤清一, 2020b. 環オホーツク海域考古学の新天地 - 新北方編年体系の検証から佐藤編年の広域改訂へ -. 六一書房. 628pp.
- 柳澤清一, 2022. 北海道島とアムール川流域・沿海地方の広域編年 - 土器類・帯金具に見える刻符記号をめぐる -. 考古学論攷III - 千葉大学文学部考古学研究室 40周年記念 -: 393-416. 六一書房.
- 柳澤清一・山谷文人・長山明弘・廣田哲徳, 2022. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第3・4次発掘調査概報. 礼文・利尻島遺跡調査の会・利尻富士町教育委員会. 55p.
- 米村衛・梅田広大編, 2009. 史跡最奇貝塚 - 平成15～20年度史跡最奇貝塚史跡等 - 登録記念物保存修理事業発掘調査報告書 -. 網走市教育委員会. 609pp.
- 中文
- 中国社会科学院考古研究所編著, 1997. 六頂山渤海鎮, 中国田野考古報告集: 考古学專刊 (丁種第56号). 中国大百科全書出版社
- 遼寧省文物考古研究所阜新市文物組, 1992. 阜新南皂力營子1号墓. 遼海文物學刊, 1992 (1): 54-63.
- 内蒙古自治区文物研究所・赤峰市博物館・阿魯科爾沁旗文物管理所, 1996. 遼耶律羽之墓發掘簡報. 文物 1996 (1): 4-32.
- 露文
- Герус, Т. А. 1979. Археологические памятники залива Терпения, Археология Амуро-Сахалинского региона: 30 - 36, 143 - 148. Владивосток.
- Медведев, В. Е., 1982. Средневековые памятники острова Уссурийского, Новосибирск.
- Василевский А. А., В. А. Дерюгин, Т. Куамаки, М. Хукуда, К. Мазкава, С. Онуки, Я. Иде, 2007. Работы российско-японской археологической экспедиции на средневековых объектах поселения Седых-1 на стационарной учебной базе Сахалинского Государственного Университета в селе Охотское в полевой сезон 2006 года, 東京大学常呂実習施設 研究報告, (3): 95 - 105.
- Шубин, В. О., 1979. Раскопки многослойного поселения

Озерск I, Археология Амуро-Сахалинского региона: 5-29, 74-142. Владивосток.

附表・附図出典

- 表 1. 1～5, 塚本 (2007). 6～12, 熊木 (2005). 13～19, 熊木 (2018a).
- 図 1. 筆者原図.
- 図 2. 1～8, 児玉 (1948). 9～15, 名取・大場 (1964). 11・12・15, 筆者トレース. 16～29, 筆者撮影・原図.
- 図 3. 1・5～7, 児玉 (1948). 2・3・8～10, 筆者原. 4, 名取・大場 (1964). 11～13, 沢・宇田川・豊原 (1971). 14・16・17・20～22, 筆者原図・撮影. 15・18・19, 宇田川編 (1981). 23～26, 柳澤 (2020, 第 127 図を再編).
- 図 4. 1・2, 内山・熊木・藤沢 (2000). 3～12, 筆者原図. 13～15, 種市ほか編 (2001). 16・17, 松谷・上屋 (1988).
- 図 5. 1～11・21～27, 筆者原図. 12～20, 内山・熊木・藤沢 (2000). 28～36, 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022).
- 図 6. 1～4(1'～4'), 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022). 5・24～33, 大井・大場編 (1976). 6, 筆者撮影. 7～10, 川名・高島 (2010). 11, 大川 (1998). 12, 大井 (1972). 13, 後藤 (寿) (1937). 14～19, 上野 (1980). 20・21, 大場 (1968). 22・23, 前田・山浦編 (1992).
- 図 7. 1・6・7, 大井・大場編 (1976). 2～4, 筆者撮影. 5, 前田・藤沢ほか (2001). 8・9, 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022). 10・11, 筆者撮影. 12～15, 礼文・利尻島遺跡調査の会編 (2018).
- 図 8. 1～5・9～11, 筆者撮影. 6～8・14, 大井・大場編 (1976). 12・18・19・22, 柳澤ほか編 (2022). 13, 岩城ほか編 (2017). 15・16, 大井 (1972). 17・21, 礼文・利尻島遺跡調査の

会編 (2018). 20・23, 大川 (1998).

- 図 9. 1・2・9～17, 上野 (1980). 3～8・23～31, 大谷・田村 (1982). 18・19, 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022). 20～22, 大谷・田村・西蓮寺 (1981).
- 図 10. 1・2・5・19, 内山・熊木・藤沢 (2000). 3・4・6, 筆者原図. 7～18, 大谷・田村 (1982).
- 図 11. 1～6・9～11・13～16, 大谷・田村 (1982). 7・8, 藤井編 (2001). 12, 大谷・田村・西蓮寺 (1981). 17, 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022) 参照④, 内山・熊木・藤沢 (2000).
- 図 12. 高畑 (1894).
- 図 13. 1～4・9・10・17, 岡田・宮編 (2000). 5～8・14～16, 大谷・田村 (1982). 11・12, 大谷・田村・西蓮寺 (1981). 13. 19 (改変), 藤井編 (2001). 18, 高畑 (1894). 20・21, 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022).
- 図 14. 1, 高畑 (1894). 2・3, 蓑島 (2015). 4・5, 大谷・田村 (1982). 6, 大谷・田村・西蓮寺 (1981). 7, 田口・鈴木 (1996). 8～14, Шубин (1979). 15・16, 熊木ほか (2007). 17, Василевскийほか (2007). 18～22, Медведев (1982). 23～28, 筆者・長山原図 (柳澤, 2020b; 柳澤ほか編, 2022).
- 図 15. 1, 高畑 (1894). 2, 蓑島 (2015). 3, Медведев (1982). 4, Герус (1979). 5, 新潟・宇田川編 (1992). 6, 大井・大場編 (1976). 7, 筆者撮影. 8, 馬場 (1936).
- 図 16. 1, 内蒙古自治区文物研究所ほか (1996). 2, 遼寧省文物考古研究所阜新市文物組 (1992). 3, 大谷・田村 (1982). 4, 筆者・長山原図 (柳澤ほか編, 2022). 5, 内山・熊木・藤沢 (2000). 6, 大谷・田村・西蓮寺 (1981). 7, 田口・鈴木 (1996). 8, 高畑 (1894). 9, 蓑島 (2015).